

文庫士 遠藤隆吉 著

虛無恬淡主義

東京 弘道館藏版

明治
39 6 7
内交

序言

社會の組織愈、緻密に趣き、個人の交通益々頻繁を加へ、人生は追々外的生活に忙殺せられんとす。使命の大任を負ひたる者、而して意を粉粧の爲に致し、育英の偉業に當る者、而して心を技藝の末に碎く。昔者周の衰ふるや、天下の諸侯、繁文縟禮を以て、人士を拘束し、形式に流れ、虚儀に走り、而して心は即ち屑々焉たる小人なりき。老子は之れを以て得たりと爲さず。超然として一種の實踐系統を構成せり。周の時を以て今の時を見る。或は甚だしき者あり。乃ち老子の書未だ以て死せりとなす可らざるなり。予故に其の系統を叙し、以て同感の少年に

示めず。固より士君子の覽を賜ふべき者にあらざるなり。

巢鴨村舎に於て

遠藤隆吉識

明治三十九年五月二十日

凡例

- 一、此の書は社會各種の方面に於る人士の實踐系統を述べたる者。
- 一、老子の本文讀み難き所は林希逸の註によりて之を解せり。
- 一、上篇下篇を別にしたるは其の思想の異なる所を明かにせんためなり。急がしく讀む人は上篇丈(老子哲學(一))を讀まるべし。
- 一、老子の文章は價值あるが故に繁を顧みず全文を引用せり。又反覆せる所も多し。
- 一、目錄所載以外に

老子の傳

老子の著書及び註脚

老子教の變遷

の稿あれども今は只だ實踐系統を紹介するに止め他日を待て全部を梓せんとす。

凡例

虚無恬澹主義

目次

老子の小傳……………	一
第一章 老子學の系統……………	四
第二章 老子の哲學(一)……………	一八
第一節 老子の智識論……………	一九
第二節 老子の根本目的……………	二一
第三節 老子の根本思想……………	二五
第四節 天地に於ける無……………	三〇
第五節 萬物に於ける無……………	三三

第六節 聖人に於ける無……………三六

第七節 人主に於ける無……………四〇

第八節 處世に於ける無……………四五

第九節 政畧に於ける無……………五二

第十節 老子の道の哲學的解釋……………五五

第三章 老子の哲學(二)……………六二

第一節 總論……………六二

第二節 宇宙論……………六六

第三節 倫理論……………六九

第四節 萬物論……………七二

第五節 政治論……………七五

第六節 處世論……………八六

第七節 軍法論……………九五

第八節 人格論……………九九

第九節 老子の道の哲學的解釋……………一〇一

第十節 結論……………一〇六

第四章 老子哲學の内に含有する胚種……………一〇八

虚無恬澹主義

文學士 遠藤隆吉 著

老子の小傳

老子は楚の苦縣屬郷曲仁里の人なり。姓は李氏。名は耳。字は伯陽。證して聃と曰ふ。周の守藏室の史なり。孔子周に適き禮を老子に問はんとす。老子曰はく。子の言ふ所は其の人と骨と皆已に朽ちたり。獨り其の言あるのみ。且つ君子其の時を得れば則ち駕す。其の時を得ざれば則ち蓬累して行る。吾れ之れを聞く、良賈は深く藏して虚きが如く、君子は盛徳ありて容貌愚の如し。子の驕氣と多欲と恣色と淫志とを去れ。之れ皆子の身に益なし。吾れ子に告ぐる所

以是の如きのみ。孔子去り弟子に謂つて曰はく。鳥は吾れ其の能く飛ぶを知り、魚は吾れ能く其の遊ぶを知り、獸は吾れ能く其の走るを知る。走る者は以て罔を爲す可く、遊ぶ者は以て綸を爲すべく、飛ぶ者は以て矰を爲すべし。龍に至りては吾れ其の風雲に乗じて天に上るを知る能はず。吾れ今日老子を見るに、其れ猶龍の如き邪。老子道徳を修む。其の學自ら隠し名無きを以て務と爲す。周に居る之を久うし。周の衰うるを見、迺ち遂に去り關に至る。關の令尹喜曰はく。子將に隠れんとす。彊ひて我が爲めに書を著はせ。是に於て老子迺ち書上下篇を著はす。道徳の意を言ふ五千餘言にして去る。其の終る所を知る莫し。或は曰く老萊子も亦楚人なり。書十五篇を著はし、道家の用を言ふ。孔子と時を同うすと。蓋し老子百有六十餘歳。或は言ふ二百餘歳と。其の道を修めて壽を養ふを以てなり。孔子死するより後百二十九年なりと。而して史記に周の太史儋秦の獻公を見て曰は

く始め秦周と合して離る。離れて五百歳にして復た合ふ。合ひて七十歳にして霸王たる者出でんとあり。或は曰はく。儋は即ち老子なりと。或は曰はく非なりと。世其の然るや否やを知るものなし。老子は隱君子なり。老子の子名は宗、魏將と爲り、段干に封ぜらる。宗の子注。注の子宮。宮の玄孫假。假漢の孝文帝に仕ふ。而して假の子解、膠西王卯の太傅となる。因りて齊に家す。世の老子を學ぶ者は則ち儒學を細く。儒學も亦老子を細く。道同じからざれば相爲に謀らずと。豈に是を謂ふか。李耳無爲自ら化し。清靜にして自ら正し。

(史記列傳)

第一章 老子學の系統

老子其人の氏名已に明かならず。其の學統の如き固より明かにするを得ず。然るに老子經の思想は之を明かにするを得。從て其の當時這般の思想が存在せしや否やを明かにするを得。今古來老子の道の出たる淵源となす者を述んに諸説あり。

(一) 黃帝に出づとなす者。古來黃老の道と併稱し其の説最も廣く行はる。黃帝に關しては古來俗説甚だ多し。歴史綱鑑補の文は此れ等を蒐綴せるが故に之を左に掲ぐ。

帝河圖を受く。日月星辰の象を見る。是に於て始めて星官の書あり。大撓に命じて五行の情を探り、斗綱の建す所を占はしむ。是に於て始めて甲子を作る。容成に命じて蓋天を作らしめて以て周天の形に象とり。六術を綜し以て氣運を定む。因て鬼臾區に問て曰はく。上下の

周紀其れ數ふべきや。對へて曰はく。天は六節を以てし、地は五制を以てす。天氣を周る者は六期を備と爲し。地紀を終る者は五歳を周と爲す。五六合する者は歲三十、七百二十氣を一紀と爲し。六十歲千四百四十氣を一周と爲す。大過斯に及ばず以て見るべし。乃ち五量に因て五氣を治め。消息を起して發斂を察し、以て稠歷を作る。歲甲寅を紀し日甲子を紀して而して時節定まる。是の歲已酉朔旦、日南至して神策に應じ、寶鼎を得たり。晷して鬼臾區に候問す。對へて曰はく。是を天の紀を得、終て而して復た始ると謂ふ。乃ち日を迎へて筮を推し、十六神を造り邪分を歷積して以て閏を置き、甲子に配して而して節を設く是に於て時惠ひて而して辰從ふ。隸首に命じて算數を作らしむ。伶倫に命じて律呂を造らしむ。榮援に命じて十二鍾を鑄て月節を協はしむ。以て五音を和して天の時を立て人の位を正す。大容に命じて咸池の樂を作らしむ。車區に命じて星氣を占し。容成兼て

之を總ぶ。帝冕を作りて旒を垂れ纒を充つ。玄衣黃裳を爲りて天地の正色に象る。旁く葷翟草木之華を觀て乃はち五采を染めて文章を爲し以て貴賤を表はす。是に於て袞冕衣裳の制興る。寧封に命じて陶正と爲し。赤將を木正と爲し。以て器用を利す。共鼓化弧に命じて木を剝て舟と爲し、木を刻て楫と爲して以て通ぜざるの邑夷に濟り、斗の周旋に法りて魁方に杓直して以て龍角を携へ、大輅を作りて以て四方に行く。是に山て車制備りて牛を服け、馬に乗り、重を引き、遠に致して而して天下利す。帝宮室の制を作る。遂に合宮を作りて上帝を祀り、萬靈に接はり、政教を布く。金を范して貨を爲り、金刀を制し、五幣を立つ。九棘の利を設けて輕重の法と爲す。以て國用を制して而して貨幣行はる。帝人の生るゝや陰を負て陽を抱き、味を食して色を被り、寒暑之を外に盡し、喜怒之を内に攻め、天昏凶札君民代る々々あるを以て、乃ち上に窮して下に際き、五氣を察し、五運を立て、性命を洞にし、陰

陽を紀し、岐伯に咨りて内經を作る。復た俞跗岐伯雷公に命じて明堂を察し、息脉を究めしむ。巫彭桐君方餌を處して而して人以て年を盡すとを得たり。元妃西陵氏に命じて民に蠶を教へしむ。是に於て野を盡し、州を分ちて百里の國を得ると萬區。匠に命じて國邑を營ましめ。左右大監を置て、萬國を監せしむ。萬國遂に和ぐ。土を經し井を設けて以て争端を塞ぎ。歩を立て、畝を制して以て足らざるを防ぐ。八家をして井を爲り、井四道を開て八宅に分たしむ。井一を鄰と爲し、鄰三を明と爲し、明三を里と爲し、里五を邑と爲し、邑十を都と爲し、都十を師と爲し、師十を州と爲す。之を井に分ちて州に計るときは則ちち地著れて而して數詳かなり。帝天地の紀幽明の占、死生の説、存亡の難私に順ひて時は百穀草木を播し、旁く日月星辰水波土石金玉を羅らぬ。心力耳目を勞動し水火財物を節用す。是に由りて民僞を習はず。官私を懷かず。市價を預せず。城郭閉ぢず。利を見て争はず。風雨時に

若ひ。人天札無く、物疵病無く。虎豹妄りに噬はず。鷲鳥妄りに搏たず。裔夷の人來り享せざると罔し。草あり、庭に生ず、佞人入れば則ち之れを指す。名けて屈軼と曰ふ。鳳凰阿閣に集くひ、麒麟苑囿に遊ぶ。由是觀之、黄帝は天地、河圖、死生、幽明、神仙、醫藥、五氣、五運等の説に通ぜし者。其の他支那に於ける種々の文明の創設者たり。

夫れ堯舜以前は孔子の言はざる所、後世何によりて其の信を取らんや。况んや其の詳かなるに於てをや。黄帝の史は全く信ず可らず。但た其の支那に在りて早く傳説の源となる丈け支那文明に大功ありしなるべし。而して莊列の徒、思ふがまゝに其の名を濫用し、奇説臆斷隨て興る。許由、下隨務光の如き又莊周等の假言にして信を措くべからず。今日黄帝の書と稱する者あるも亦信ずるに足らず。

故に老子の道が黄帝に出たりとするも何の信を取る所なし。

(二) 周易に出づとなす者。前漢の嚴遵、隋の王績、宋の邵康節、日本

の物徂徠等此の説を取る。其の根據とする所は老子の思想の易の思想に類せる者ありと云ふに在り。然れども周易は明かに人倫道德を説ける者にして、「道可道、非常道」と言ふが如き思想と合ふ所なし。

(三) 容成に出づとなす者。容成に就ては呂覽、列子、韓詩外傳各其の説を異にす。故に其の説亦取る可らず。

(四) 史官に出づとなす者。漢書藝文志に云はく。

成敗存亡、禍福古今の道を歴記し。然る後要を秉り、本を執り。清虛以て自ら守り。卑弱以て自ら持す。

是れ一の想像説にしてのみ。但だ社會に關して起れる者なりとの思想を包含す。此れ取るべしとなす。社會に關せるは固より然り。之を史官なりと斷言するは想像も亦甚だしと謂ふべし。果して然らば何れの時代の歴史家も老子と同様の思想をなすと曰はざる可らず。

故に老子の系統を他の哲學系統に求む可らず。唯此の思想の當時に蔓

延せしとは後に述ぶる所によりて知るべし。蓋し支那は政治的現象の繁雜なりし社會なり。諸群割據し之を統一すること甚だ難し。堯舜は即ち之に成効せし者。其の法を承けたる者を禹湯文武となす。載せて尙書にあり。尙書は一箇の政治書なり。政治の法は周の禮樂に至りて極まる。孔子は此の學統を蹈める者、治國平天下を以て究竟の目的となす。堯舜と云ひ禹湯文武と云ひ周公孔子と云ふ皆政治家なり。而して文獻の徵すべき者の中に於て第一にある者は此れ等聖人の言行を集めたる政治書たる尙書是れのみ。當時の識者は皆政治を知れる者のみ。政治に於て意見を異にするは諸説の岐るゝ所以なり。孔子以前に於ては戰國の頃の如く諸學説の併起勃興せしとなしと雖も、已に異端の之ありしとは孔子が攻乎異端斯害也已一と言へるに由りて知るべきなり。異端も社會經營に關するものなるとは孔子が攻むるは斯れ害なるのみと言へるによりて知るべきなり。異端と言ふ中に老子の道も包含せらるゝや、又老子の道は當時已に一

派をなして社會の一方面に旗幟を樹てつゝありし者なるや固より知る可らず。但だ意を以て之を推すに老子の道は社會を經營するにあれども其の言深遠にして圭角少し。單に社會を冷評するものとして一部の人士の間に喧傳せられ而して傲然社會に立ちて怒號するとなし。故に孟子亦之を排せず。揚墨に至りては奔走以て敷説し、堂々として一旗幟をなす者故に孟子之を排斥したるなり。戰國の時に至り莊子の名も濫用せられ肆然たる一派として目せらるゝに至れり。

老子の思想は孔子の思想と矛盾せる者にはあらざれども其の學風に於て反對なる所あり。老子は閑々として孔子は汲々たり。老子は悠々として孔子は子々たり。而して老子風の思想は孔子の時に存在せり。論語に曰はく。

原壤夷して俟つ。子曰はく。幼にして孫弟ならず。長じて述ぶると無し。老て死せず。是を賊と爲す。

注に「原壤は孔子の故人、母死して歌ふ、蓋し老氏の流、自ら禮法の外に放なる者」とあり。又曰はく、

子啓を衛に撃つ。糞を荷ふて孔子の門を過る者あり。曰はく。心有る哉。磬を撃つ乎。既にして曰はく。鄙なるかな。徑々乎たり。己れを知るなきなり。斯れ已まんのみ。深ければ則ち厲し。浅ければ則ち掲ぐ。子曰はく。果なるかな。之を難んずるとなきなり。

是れ隱士にして孔子時勢の已むべからざるを知らず。淺深の宜しさに適ふを知らず。徒らに子々として治國平天下を事とするを譏る者。老子風の思想なり。論語に又曰はく。

或る人曰はく。徳を以て怨に報ひば何如。子曰はく。何を以てか徳に報ひん。直を以て怨に報ひ。徳を以て徳に報ゆ。

「以徳報怨」は今老子の書に見ゆと註せり。即ち當時老子の思想の存在せしと明らかなり。又曰はく。

微生畝孔子に謂て曰はく。丘何んぞ是の栖栖たる者をなす。乃ち佞をなすなからむ乎。孔子曰はく。敢て佞を爲すにはあらざるなり。固きを疾んでなり。

此れ亦孔子が栖々たるを譏る老子流の思想なり。

由是觀之。孔子の道に反對する老子流の思想の當時に存在せしとは毫も疑ふ可からず。又其の此く蔓延せる所より看れば其の孔子に先てるとも亦略ぼ疑ふ可からず。孔子の道は孔子に始まるにあらず。集めて大成したるなり。老子の道も亦老子に始まるにあらず。集めて大成したるなり。古言あり古意あり。自家の言あり。孔子此の書を見しとなきか。又は見しも了解する能はざりしか。或は之を攻むる害なりとして關せざりしか。孔子との關係如何。

大槻如電氏曰はく

前略發て始めて文字に書き遺したので、老子の著作は令尹喜の手許に一

本しか無い譯なんです。孔子は此事は知らふ筈が無い。國も西東と違ひ道も何千里と隔て居るから老子は述べて作らない人といつまでも思てるのです(東洋の哲學八の九)

是れ地の隔たりしたため孔子は之を見しことなしとせるなり。然れども老子風の思想が此く廣く蔓延せしより見れば其の學説は早く世上に知られ隨て孔子之を知らざりしとなす可らず。論語孟子の中に老子の語はなきも孔子之を知らざりしと云ふ可らず。同時に存在せる偉人は必ず相評すとなす可からざるなり。故に余は一個の想像説として左の如く推定す。孔子は老子の書を知らざるも其の説を仄聞し而も一の隱士として深く之に關せず。只管己れの道を行ふに汲々とし他を顧みざりしなるべし。

老子は思慮深遠にして妄動せず。機を見て發す。此の底の人なり。此の精神作用は甚だ複雑にして一言にして盡くす可らず。然れども其の情調に至りては各人之を心會すべし。老子一書の言は一切此の情調により

て貫通せらる。古人にして道般の情調なりしものあり。太公望、管仲、范蠡是れなり。

(一) 太公望。周の西伯出でて獵す。呂尙に渭水の陽に遇ふ。釣す。其の父太公の望みし人なるを以て之を號して太公望と曰ひ載せて歸る。後武王、西伯の木主を載せて紂を伐つ。伯夷、叔齊馬を叩て之を諫む。左右之を殺さんとす。太公曰はく義人なりと。扶けて之を去らしむ。其の思慮の冷靜なるの一端を見るべきなり。武王子孫の恒となすべき者を問ふ。對へて曰はく。

黄帝顓頊の道丹書に之れ有り。曰はく。敬意に勝つ者は吉なり。怠敬に勝つ者は亡ぶ。義欲に勝つ者は從ひ。欲義に勝つ者は凶なり。凡そ事強めざれば則ち枉る。敬せざれば則ち正しからず。枉るものは廢滅す。敬する者は萬世之を藏す。約に之を行ふとを得。以て子孫の恒と爲すべしと云ふは此の言の謂なり。

此れ處世法の心術を講じたる者にして。此の心掛けあるは老子に似たる處あり。周公太公に問ふ、何を以て齊を治めんと。曰はく賢を尊び功を尙ばん。周公曰はく後世必ず篡弒の臣あらん。此の功を尙ぶは老子が功利を尙びしと相似たり。凡そ太公望の言行を對照すれば則ち太公望の人となりの孔子派にあらずして老子派なるを知らむ。

(二) 管仲。鮑叔管仲を桓公に勸むるの言に曰はく。

夫れ其の君の爲めに動けばなり。若し宥して之を反さば夫れ猶是の如かるべし。

史に稱す。桓公諸侯を九合し天下を一匡す。兵車を以てせず。管仲の功なりと。二國の覇者の補にして而して能く此の如き者豈老子に近しと謂はざるべけんや。

(三) 范蠡。越の人なり。

范蠡越を去る。越伯其大夫文種を殺す。初め蠡、句踐と深く謀ると二

十餘年、竟に吳を滅す。蠡以爲らく大名の下には以て久しく居り難し、且つ句踐とは與もに患を同うす可くして與に安に處り難しと。遂に輕舟に乗じて五湖に遊び、海に浮んで齊に出づ。姓名を變じて自ら鴟夷子皮と號す。父子産を治めて數千萬に至る。齊人其の賢を聞いて以て相と爲す。蠡嘆じて曰はく。家に居て千金を致し、官に居て卿相を致す。此れ布衣の極なり。久しく尊名を受くるは不祥なりと。乃ち相の印を歸し盡く其の財を散し、間行して陶に止まる。又之を陶朱公と謂ふ。蠡去るとき、大夫種に書を遣りて曰はく。飛鳥盡て良弓藏る。狡兔死して走狗烹らる。敵國破れて謀臣亡ぶ。越王は長頸鳥喙。與に安樂を共にすべからず。子何を去らざる。種疾と稱して朝せず。人或は謂すらく種且さに亂を作さんとすと。越王之に劍を賜ふて自殺せしむ。

久しく尊名を受くるは不祥なりとして斷然相の印を歸せしもの、全く老

子の思想なり。

即ち老子流の思想成語人物の早く存在せしこと疑ふ可からず。一たび老子なる人によりて大成せられ時勢の非なると共に之を信奉する者漸く多きを加へたり。

第二章 老子の哲學(一)

第一節 老子の智識論

老子の言は哲學として見るべきや。哲學が論理的智識の連続にして理性のみにより證明し得べき者となさば老子の教義は哲學にあらざるなり。老子の言は或る精神状態に達したる者の言にして此の状態に達せざるものには理解し能はざる所あるなり。例へば弱強に勝つと言へる如き論理的に言へば誤りなり。然れども或る種の心持を以て言へば其の當れるを見る。故に以て哲學ならずとするを適當なりとす。若し以て哲學ならずとすれば支那には哲學なる名稱を下すべきもの甚だ少し。孔子の如き殊に然りとす。

老子の思想は前に言ひし如く支那に傳はり來れるものを根據としたる

ものにして、永き経験の結果、妥當と感ぜらるゝ所のものなり。一種の精神的情調に達すれば、則ち能く然りと感ずるを得。然らざれば、則ち首肯する能はざるなり。何が故になる反問は、往々にして應用せられず。老子は斷言するとあれども、其論歩を説明すると稀なり。老子は論理の進歩にあらずして、個々の實驗的真理の一系統なり。故に老子の智識論は、意志の経験によりて之を得ると謂ふに、外ならざるなり。

意志の経験とは、實行を累ねて而も最も善く其目的を達し得る所以の方向を發見したるとなり。老子の學問は皆實行に關係あり。隨て意志に關係あり。意志の方向及び状態が即ち是れ老子の教ゆる所なり。故に老子の思想を敘述するは此の方向と状態とを敘述するなりと心得べく、其の大方向如何特別なる方向如何と吟味すべし。然りと雖も老子は直覺の如き真理を直接に把持し得る能力を認めたるにあらず。又經驗なる原理に氣付きしにもあらず。老子自身に於ては智識の淵源に付て思慮せしとなきな

り。唯後人より見れば、意志の経験を以て智識の唯一の方法となせしと云ふに外ならざるなり。換言すれば、經驗論者にあらずして、經驗的立脚地に立てる者なり。泰西の哲學史に於ては蘇氏以來已に智識の淵源に關する研究あり。プラトーンの回憶説の如き其の最も有名なるものなり。近世に至りては「ペーコン」「ホップス」「ロック」「ヒューム」「カント」「ライプニッツ」「デカルト」「スピノーザ」皆之に付きて思索を弄せり。然るに支那に於ては智識の淵源に付きて論究せし者一も之れなし。此れ支那人の社會的、政治的、向外的なりしに因るものなり。而して老子も其の一人なり。

第二節 老子の根本目的

老子の言は皆實行に關す。然らば何を實行せんとせしか。曰はく。自己の性命を全ふし力を勞する少ふして以て最大の名利を得むとする是れなり。是れを老子の根本的の目的とす。三要素あり。自己の性命を全

ふすると力を勞する少きと最大の名利を得ると是れなり。
 老子は畢竟名利の學なり。老子は宇宙の哲學を講ずるも哲學のために之を講ずるにあらず。名利を達する手段として之を講ずるに外ならず。老子は修養の法を講ずるも修養のために之を講ずるにあらず。名利の目的を達する手段として之を講ずるに外ならず。老子は畢竟名利の學なり。

故に老子は生死を解脱するを説かず。其の身を全ふすべきを説く。夫惟不爭。故無尤矣第八と云ひ、功成名遂。身退。天之道第九と云ひ、沒身不殆第十と云ふ者、其他身を顯はれざるの地に置かんとする言甚だ多し。皆以て之を證すべきなり。之を彼の生死を度外に附せんとするの教に比する時は其の軒輊果して如何ぞや。學者須らく老子の根本的の目的の在る所遠きにあらざるを明かにすべきなり。

又老子は勞少くして名利の大なるを欲する者にして、甚だしき利己主義

義と謂ふべきなり。乃ち曰はく

樸小と雖も天下敢て臣とせず。侯王若しよく守らば。萬物將に自ら

賓せん。第三十

又曰はく

故に常に無慾にして小と名くべし。萬物之に歸して而して主を知らず。大と名くべし。此を以て聖人は能くその大をなすなり。其の自ら大なりとせざるを以て。故によく其の大をなす。第三十

又曰はく

功成り事遂げて百姓皆我を自然なりと云ふ。第七十
 是れ等の言は以て之れを證明し得て餘りあり。之を孔子が人事を行ひ以て天を待つと云ふの説に比すれば其軒輊果して如何ぞや。故に老子は名利の學なり。名利を得んため手段を教ふる者に外ならず。

名利の學と云は、甚だ狹隘なる説の如し。實際に於て孔子が天命を待

つ、の、安、心、立、命、に、如、か、さ、る、な、り。然、れ、ど、も、尋、常、一、様、の、効、利、主、義、は、只、管、之、を、得、る、の、客、觀、的、方、法、に、齟、齬、す、る、の、み。絶、て、自、己、の、精、神、を、修、養、す、る、に、思、ひ、至、る、こ、と、な、し。唯、彼、の、泰、西、に、在、り、て、正、直、は、最、も、良、き、政、略、な、り、と、言、へ、る、が、如、き、は、齟、齬、者、流、に、比、す、れ、ば、見、る、處、高、し、と、謂、ふ、可、き、な、り。老、子、は、此、の、方、向、に、於、て、更、に、數、步、を、進、め、或、る、人、格、の、形、式、を、以、て、必、要、條、件、と、な、し、た、る、な、り。是、の、故、に、老、子、を、修、む、る、者、は、一、方、に、於、て、は、人、格、に、影、響、せ、ら、れ、一、方、に、於、て、は、名、利、を、全、ふ、す、る、を、得、べ、き、な、り。

今老子教の人格に影響する態象に關し二三氏の述べたる所を紹介せんに

朱子曰はく。莊子は跌宕老子は收斂と。又曰はく。張良は老子の妙所を得たり。漢の文帝曹參は唯だ老子の皮膚を得たりと。又曰はく

吾宋の人多く莊老を説く。未だ莊老の實所を盡くすに至らずと。

白樂天曰はく。人情をして儉樸時俗をして清和ならしめんと欲すれば黃老の道を體するより先きなるはなしと。

眞德秀曰はく。老子が將さに之を喻せんとすれば必ず固く之を張るといへるは陰謀の言なり。陰謀は范蠡陳平等に多しと稱すと。

朱子は又老子の道は「奸智に流る」と言へり。要之。老子の道を修むるときは智慮ありて且つ收斂するの人となることは疑ふ可らず。眞德秀は單に其の一方面を窺ひたる者而して白樂天の言は老子の道を政治に應用したるを説けるなり。老子の道を修めたる結果然りと云ふにあらず。若し老子の道を修め而して修めたる人其の人の人情儉樸なるに至る者とすれば是れ大なる誤謬なり。白樂天の意は決して然るにあらず。社會の人情と時俗とに就て言へるに外なうざるなり。

第三節 老子の根本思想

老子は從來の思想を集めて大成し以て歸一する所を得たり。何ぞや今日語にて形容すれば無的靜的虛的是れなり。是れ思想にあらずして一

の心持なり。感情を包含すると同時に智識意志をも包含す。故に哲學的原理にあらざして處世法上の原理なり。

「無的」は虚無「Nicht sein」にあらずして無なる如きなり。有れども無きが如く見え盛んなれども盛んなるなきが如く見えしむる是れなり。老子は一切の行動に於て「無的」を以て主義となせり。「靜的」も靜なるにあらずして靜なる如きなり。靜なれば活動なきなり。老子は活動なきにあらず活動の靜的ならむことを要するなり。換言すれば靜的なる心持に合はむとを要するなり。「虚的」も亦以上二例の如く虚なるにあらずして「虚的」なるが如きなり。良賈は深く藏して空しきが如しと云ひ、心は無きにあざざれども之れを形容して「虚無恬澹」と謂ふが如き是れなり。已に「無的」と云へば「虚的」と言はざるも充分了り居るが如くなれども實際に於ては不充分なり。何となれば「無的」は「有」の否定なれども「虚的」は「實」の否定にして多少其の趣きを異にすればなり。

要するに老子は百千の行爲皆「無的」「虚的」「靜的」なる心持に合はんとを要するなり。三者は各別の原理にあらずして同一の心持を指示する異方面に外ならざるなり。

他の言を以てすれば虚無恬澹なる形容詞が最も善く適當す。本人自身にも此の事を感じつゝあるなり。蓋し此れ情調の和合然らしむるなり。情調は自然物にも亦存在す。例へば黄色なる聲と云ひ、苦き顔と云ふが如し。又は平かなる山は温和なる人の如く思はれ、峻峻なる山は陰峻なる人の如く思はる。是れ等は皆情調に於て一致する所あるなり。情調は更に之を説明するを得ず。各人之を心會するを要するのみ。今虚無恬澹も亦心の形容に外ならず。此の心の情調が虚の如く無の如く恬たる如く澹たる如きなり。

老子は其心持が虚的靜的無的ならむを要す。他語にて言へば虚無恬澹たらむとを要するなり。此心持ちが即ち處世法上の原理たるなり。虚無

恬澹なる形容辭が原理たるにあらざるなり。何となれば形容辭は形容辭にしてのみ。心持と干する所なければなり。心持こそ實行に現はれ得れ。虚無恬澹なる形容辭は外に現はるゝを得ざるなり。然れども老子は天地萬物に於ても此の状態が根本原理なるを發見せり。是れ經驗的觀察の立脚地に立つ者にして此に演繹的關係を發見する能はず。換言すれば老子は一の絶對を假定し天地萬物を以て其の發現なりとして解釋したるにあらず。天地萬物を觀察し發見のまゝに記述せるに外ならず。此に至り老子の哲學を了解するには虚無恬澹なる状態を以て根本原理となさざる可らず。此れ状態なり。抽象的に吾人の思考せる所なり。其の物あるにあらず。古來老子を解する者皆無を以て根本原理とす。大なる誤りなり。無は無き物(notthing)の意にあらずして無的の無なり。其の状態の無的なるを指すなり。換言すれば無なる形容詞を應用して欲する状態を以て根本となすなり。

故に吾人の目よりすれば老子の無を以て絶對となし若くは睿智的實在(logos)となすは老子を誤解せる者なり。老子の根本は無にあらずして無的状态なり。無的状态は一の概念にしてのみ。然れども無的状态を抽象して考ふる時は無的状态なる者ありとなすは吾人思想の常なり。黄と言へは黄色として物體化し考へると言へば考へるとして物體化す。故に無的と云ふも亦無なるものとして物體化するは自然なり。即ち老子も亦有物混成。先天地生と云ひ恰も一の存在物と爲せるが如し。隨て無的状态を發見せる處即ち其道實在すとすなり。故に老子一篇は無的状态を觀察せるに外ならず。老子は此の状態を以て宇宙間に於ける最も根本的な状態なりとなすなり。演繹は哲學の方法なり。泰西の哲學者此の方法を用ひざる者なし。彼等の演繹するや論理的關係に於てするなり。然るに東洋の哲學家の演繹するや論理によるにあらずして情調に於て一致する行動を爲さんとするなり。老子は此數に漏るゝと能はず。演繹すること

虚無恬澹主義
とあれば必らず「虚無恬澹」と情調に於て一致する觀念を求むるのみなり。

三〇

第四節 天地に於る無

老子は天地を観察し、支那從來の思想の如く、天地より萬物を生ずる者となし、之を活動的に觀察せり。春は生じ、夏は長じ、秋は收め、冬は藏す。加之、人畜蟲魚の生成死滅する其の端を知らず。老子は之を以て皆天地の作用なりとせり。而も天地の作用を抽象的に考ふるときは、何等聲臭のあることなし。即ち天地を以て虚的無的靜的にして、能く是れ等の作用をなし得る者となせり。曰はく。

物あり混成す。天地に先ちて生ぜり。寂たり寥たり。獨立して改めず。周行して殆からず。以て天下の母たるべし。吾れ其の名を知らず。之を字して道と謂ふ。強て之れがために名けて大と曰ふ。

天地の始めに一物生ぜり。始終獨立して改めず。周行して殆からず。吾れ其の名を知らず。之を字して道と謂ふ。強て之れがために名けて大と曰ふ。

大を逝と曰ひ。逝を遠と曰ひ。遠を反と曰ふ。故に道大なり。天大なり。地大なり。王亦大なり。

ふべきなり。「域」は宇宙なり。「逝」は逝けるが如きなり。「反」は反りて其處に在る如きなり。

域中四大あり。而して王一に處る。第二十五章前半 天地は無的靜的虚的なり。故に自ら生ぜんとして、孜々努力するが如き痕跡なし。老子は此く皮肉に天地を観察して曰はく。

天長く地久し。天地の能く長く且つ久き所以の者は其の自ら生ぜざるを以てなり。故に能く長生す。是を以て聖人は其身を後にして而して身先だつ。其身を外にして而して身存せり。以て私なきにあらずや。故に能く其私を成す。第七

天地の進動は大なり。生ずと雖も自ら生ぜざるが如く、隨て不仁者の全く人事に關係なき者の如く然り。曰はく。天地は不仁にして萬物を以て獘狗となす。聖人は

獘狗は祭りに用ふ

不仁にして百姓を以て芻狗となす。天地の間、其れ猶ほ蒙筭の如きか。虚にして屈さず。動て出づ。

多言は數を射す。中を守るに如かず。

果して然らば、天地の活動や、全く自然に外ならずとも、觀察するを得べし。

老子は自然なる語を用ひて曰はく。

人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然

に法る。

要之、天地も畢竟無的靜的虚的状态を以て根柢となす。

り、雖も必ず此の狀態に復歸す。曰はく。

言希きは自然なり。故に飄風も終朝ならず。驟雨

も終日ならず。孰か此を爲す者ぞ。天地なり。天

地尙久きこと能はず。而るを况んや人に於てをや。

故に道に従事する者は道は道に同ふし。徳は徳に

終る作れ、芻狗にして用
中樂は、虚を吹して、而も
能くは、火を吹く。虚も
虚の中、虚なり、又靜
虚の中、虚なり、又靜

一時なすこと、あ

飄風驟雨も永く、根
くをなし。故に虚
無靜なるは、自然の
道なり。人も言語
少なかるべし。道
を行ひ、徳を行ひ、失ふ
時は、徳を行ひ、失ふ

同ふし。失は失に同ふす。道に同き者は道も亦之を得るを樂み、徳に同き者は徳も亦之を得るを樂む。失に同き者は失も亦之を得るを樂む。信足らず。信ぜざることあり。天地を以て無的虚的靜的となすは畢竟人より見たるに外ならず。然れと兎に角、老子は天地に對し、如上の觀察をなしたり。

第五節 萬物に於る無

老子は萬物に就ても亦同様の觀察をなし、無的虚的靜的状态を以て根本となすとすとなせり。先づ萬物並び起るも、此の狀態に復歸すとすとなして曰はく。

虚を致すこと極まり、靜を守ること篤し。萬物並び起るも、吾れ以て其の復するを觀る。夫れ物芸々た

れども各其の根に歸る。根に歸るを靜と曰ひ。靜を復命と曰ふ。復命を常と曰ふ。常を知るを明と曰ふ。常を知らざれば妄りに凶を作す。常を知れば容る。容るれば乃ち公なり。公なれば乃ち王なり。王なれば乃ち天なり。天なれば乃ち道なり。道なれば乃ち久し。身を没する迄殆からず。又道即ち無的靜的虛的狀態は銳きことなく輝くことなく渾沌たる状態なりとなし。其の萬物の根柢なるを説て曰はく。

道は沖くして之を用ふ。(或は盈たず) 淵乎として萬物の宗に似たり。其の鏡を挫き其の紛を解く。其の光を和し其の塵を同ふす。湛として存するが如きに似たり。吾れ誰れの子なるを知らず。帝の先きに象れり。

第四

萬物も根柢に於ては靜かなり。故に始は芸々たるも終に靜に復す。容は心大なるなり。能く一切を包含するなり。

「沖は虚なるなり。道は虚なる所に川あるなり。」
「湛は見る可らざる貌」
「帝の先きに象る」は天の極理の形容。

故に一切萬物は道の中に生じ道の中に滅するとも觀察し得べし。曰はく。

大道は汎たり。其れ左右すべし。萬物之を待み以て生ずれども辭せず。功成りて居らず。萬物に衣被すれども主たらず。故に常に無欲なり。小と名くべし。萬物焉れに歸して主を知らず。大と名くべし。是を以て聖人能く其の大を成すなり。其自ら大とせざるを以て故に能く其の大を成す。

章

第三

此く一切萬物に就て無的靜的虛的狀態を觀察し更に特別なる三例を以て無に山りて以て作用の行はるる所以を説て曰はく。

三十輻は一轂を共にす。其の無なるに當りて車の用あり。埴を埴して以て器となすとき其の無なるに當りて器の用あり。戸牖を鑿ちて以て室となす

輻は輪の中心に集る棒なり。轂は無なる點なり。能く軸を容る。車の用ある所以。車器、室

とき其の無なるに當りて室の用あり。故に之を有にして以て利となし之を無にして以て用をなす。

一第
章十

要之。萬物の作用は遂に無的虚的靜的狀態に復歸せざるなく無によりて生じ無を以て根柢となし無に由りて以て其の活動を演じつゝあるなり。

第六節 聖人に於る無

聖人の根柢も亦無的虚的靜的なり。聖人は大に効あれども人に譲りて居らず。己れは無なるが如し。心に萬智を貯へ身に萬行を行へども人に伐らず。虚なるが如し。如何に甚大甚劇の業をなすと雖も齷齪として勞することなし。見れば常に靜かなる如し。聖人の聖人たる所以は實に其の無的虚的靜的なるに在り。是を以て聖人の言行は得て形容す可からず。言ふが如くして言はず。行ふが如くして行はず。無爲の事をなし不言の

教を行ふものなり。曰はく。

天下皆美の美たるを知る。斯れ惡のみ。皆善の善たるを知る。斯れ不善のみ。故に有無相生じ難易相ひ成り。長短相ひ形はれ。高下相ひ傾む。音聲相和し。前後相ひ隨ふ。是を以て聖人無爲の事に處じ不言の教を行ふ。萬物作りて辭せず。生じて有とせず爲して恃まず。功成りて居らず。夫れ惟だ居らず。是を以て去らず。聖人は己れを卑きに置き無欲なるが如し。然れども是れ抑々聖人をして能く其の大事業をなさしむる所以の徳なり。曰はく。

天長く地久し。天地の能く長久なる所以の者は其の自ら生ぜざるを以てなり。故に能く長生す。是を以て聖人は其の身を後にし而して身先んず。其

皆人に利有り。其の用は無なる所あるため。

之を美と云ふは惡に比して言ふのみ。眞の美は一寸見れば不美の如し。善惡も之に同じ。善聖人は爲すなくして爲し言はずして教ふ。有無以下相對の語なり。一方なければ一方なし。

天地は自ら生ぜりとするが如き狹隘なる者にあらず。故に長久なるなり。

ば則ち器となる。聖人之を用ふれば則ち官の長たり。故に大制は割せず。第二章 一方面より見れば聖人は表面的に大事業をなさずして隠々然として能く之を成すなり。曰はく。

是を以て聖人は甚きを去り奢を去り泰を去る。第二章

甚奢泰は皆過當の名なり。

要之。聖人は無なるが如く静なるが如く又虚なるが如きなり。而して能く大事業をなすを得るなり。

第七節 人主に於る無

人主は虚無恬澹を事とし能く天下を治むるを得るなり。甚く人民に干渉することなく人民をして自ら其の處に歸らしむべきなり。曰はく。

道の常は爲すことなし。而も爲さざるなし。侯王

若し能く守らば萬物將さに自ら化せんとす。化して而して作らんと欲すれば吾れ將さに鎮むるに無名の樸を以てせんと欲す。無名の樸は亦將さに欲あらざらんとす。欲あらずして以て天下を静めば將さに自ら正からんとす。第三章

萬物化すれども更に作動せんとすれば自然の道を以て之を鎮むるなり。自然の道に據る者は欲なし。

人主は天下の中心たり。重きを天下になす所以に注意せざる可らず。曰はく。

重きは輕きが根たり。静かなるは躁きが君たり。是を以て君子は終日行けども輕重に離かず。榮觀ありと雖も燕處超然たり。如何んぞ。萬乗の主にして身を以て天下を輕んぜん。輕んずれば則ち臣を失ふ。躁なれば則ち君を失ふ。第二章

又對待を以て言ふ。重なるは輕なるを以て言ふ。静なるは躁なるを以て言ふ。君たるは臣たるを以て言ふ。榮觀ありと雖も燕處超然たり。如何んぞ。萬乗の主にして身を以て天下を輕んぜん。輕んずれば則ち臣を失ふ。躁なれば則ち君を失ふ。第二章

又曰はく。

五色は人の目をして盲ならしむ。五音は人の耳をして聾ならしむ。五味は人の口をして爽はしむ。馳騁田獵は人の心をして狂を發せしむ。得難きの貨は人の行をして妨げしむ。是を以て聖人は腹をなして目を爲さず。故に彼を去て、此れを取る。

五色五音五味あるがために人をして惑はしむ。盲聾爽に同じ。目は外物を言ふ。腹は内を言ふ。

第二章

要之。人主の天下に於るや自己自身は靜的虛的無的にして人民をして又然らしめんとする者なり。施政の方針此の道に叶ふときは天下自然の如し。故に曰はく。

太上は下之れあるを知る。其の次ぎは之を親み。之を譽む。其の次ぎは之を畏る。其の次ぎは之を侮る。故に信足らずして信ぜざるあり。猶たり其

太上は至治の世を指す。人民人主あるを知らず。以下差等あり。言謂の政治を尙ぶ。非れ

れ言を貴ぶ。功成り事遂げて百姓皆我れを自然と曰ふ第七十章

るなり。

第八節 處世論

處世の要旨は身を卑下してあらはれざるを力むるにあり。老子は富貴功名を惡むには非ず。寧ろ之れを得んとするなり。唯之れが爲めに身を全ふする能はざるを惡むなり。故に卑下して且つ柔に而かも能く其の終を全ふせんとす。水の性たるや至つて柔なり。卑下して上らず。而かも能く大業を成す。老子之れる稱へて曰はく。

上善は水の如し。水の善きは萬物を利して而して争はず。衆人の惡む所に處す。故に道に幾し。居ることは善地、心は善淵、與ふることは善仁、言は善信、政は善治、事は善能、動くことは善時。それ惟だ争は

水は卑下するを以て至善に喩へたり。衆人は卑下を惡むなり。故に曰ふ。居心、與言、政事、動等は凡て水の如くなるべしとの意。

虛無恬澹主義

が如し。衆人は皆餘りあり。我獨り遺すが如し。
我は愚人の心なるかな。
沌々たり。俗人は昭々として我れ獨り昏きが如し。
俗人は察々として我れ獨り悶々たり。澹一作忽たり
夫れ海の如し。颺一作漂として止まる所なきが
如し。衆人は皆以てすることあり。我れ獨り頑且
鄙し。我れ獨り人と異にして而して母に食するこ
とを求むるを貴ぶ。第十

又此の道を得し者を形容して

古のよく士たる者は微妙玄通す。深くして識る可
からず。夫れ惟だ識る可からず。故に強ひて之が
容をなす。豫たり冬河を渉るが如し。猶たり四隣
を畏るゝが如し。嚴たり客の如し。渙たり氷の將に

四八
乗々は馬に乗る形。
遺すは失ひて茫然
たる貌。
沌々は區別なきな
り。
悶々は無智のかた
ち。
以てするは用ふる
なり。
母は道をいふ。道
に養はるゝなり。

之れが容は之れが
形容なり。
豫は恐るゝかたち。
渙は恐るゝかたち。

釋けんとするが如し。敦たると夫れ樸の如し。曠
たり夫れ谷の如し。渾たり夫れ濁れるが如し。孰
れか能く濁て以て之れを靜にして徐に清くせん。
孰れかよく安んじて以て之れを久しうして徐に生
ぜん。此の道を保つ者は盈つるを欲せず。夫れ惟
盈たず。是を以てよく敝にして新ならずして成る。

第十五章

其の雄を知り其雌を守れば天下の繇となる。天下
の繇となれば常德離れず。復嬰兒に歸す。其白を
知て黒を守れば天下の式となる。天下の式となれ
ば常德惑はず。復無極に歸す。其榮を知りて其の
辱を守れば天下の谷となる。天下の谷となれば常
徳則ち足りて復樸に歸す。樸散すれば則ち器たり。

漢は打ち解けたる
時の貌。
道ある者は濁りて
靜かに徐々として
清く安んじて久く
徐々として動生ず
く。
新に作らずとも不
知不識の間に出來
上るなり

聖人之を用うれば則ち官の長たり。故に大制は割

れず第八章第二十

此故に道ある者は其の處にありて而して安んず。かの子々の士を見るに皆一偏に拘泥して自ら是となすなり。其の心廣からず。故に到る處にして安んずるが如きことを望む可からず。道を得たる者は其の心廣く一切を包含し。一切に照應することを得。故に到る處として安んぜざるはなし。老子曰く曰はく。

故に道に従事する者は道は道に全らし。徳は徳に全らし。失は失に全らし。道に全じきものは道も亦之れを得るとを樂む。徳に全じき者は徳も亦之れを得るとを樂む。失に全じき者は失も亦之れを得ることを樂む。信足らざれば信せざることあり

第廿三章

此故に道を得し者は自ら爲す如く圭角を立つることなし。圭角を立つる者は爲す所少き者なり。蓋し圭角を立つれば人と争ふことあり。人と争へば彼と相對の位置に陥る。相對の位置に陥れば一步を超然したる絶對の事業を立つる能はず。故に老子の哲學に於ては最も圭角を立つることを惡む。曰はく。

跛ツツガつる者は立たず。跨マカる者は行かず。自ら見る者は明かならず。自ら是とするものは彰れず。自ら伐るものは効なし。自ら矜ウカるものは長からず。夫れ道にありては餘食贅行と曰ふ。物。故に之れを惡む。故に有道のものは處らざるなり。第廿四章

跛は爪尖にて立つなり。跨るは兩股相着かざるなり。則ち歩む可らず。二句は特更なる者に喩ふ。物は無用の長物なり。故に之を惡むなり。

此故に道は人の止まる處なり。止まる處を知らば危からず。久しきに居りて其の身を保つを得。是れ老子哲學の理想とする所なり。曰はく。道の常は名なし。樸は小なりと雖天下敢て臣とせ

ず。侯王若しよく守らば萬物將之に自ら賓せんとす。天地相合して甘露を降す。人之れをせしむることなし。而して自ら均し。始めて制（有特せて）して名あり。名も亦既にあり。夫れまた將に止まるを知らんとす。止まるをすれば殆からざるなり。譬へば道の天下にあるは猶川谷の江海に於けるが如きなり。

第卅二章

常を知るを明と云ふ。常を知らざれば妄作して凶なり。常をすれば容なり。容は即ち公なり。公は即ち王なり。王は即ち天なり。天は即ち道なり。道は即ち久し。身を没する迄殆からず。第十六章

第九節 征略に於る無

五二
なり。樸は即ち道を指すなり。樸は小の如くなれども（形容）天下臣とするものなし。天地甘露を降すと同く自然の道に由りて人々其の性を養ひて均平なり。人のせしめしにあらざるなり。川谷は江海に歸し、萬物は道に歸す。解前に見よ。

天下を取らんとする者は兵を以てす可からず。兵は凶器人民を苦ましむること之れより大なるはなし。孫子曰はく。戦はずして人の兵を屈するものは善の善なるものなり。

老子も亦兵は有道者の用ゆる所にあらずとなして曰はく。道を以て人主を佐くる者は兵を以て天下に強からず。其の事還すを好む。師の居る處は荆棘生ず。

大軍の後には必らず凶年あり。故に善なるものは果にしてのみ。敢て以て強を取らざれ。果にして矜ることなかれ。果にして伐ることなかれ。果にして驕ることなかれ。果にして已むことを得ざれ。果にして強たることなかれ。物壯なれば則ち老ゆ。之れを非道といふ。非道は早く已めよ。第卅章

還は仕返へすなり。乃ち彼我を打てり。故に我亦彼を打たんとす。荆棘生ずは耕さざるなり。果は止むを得ずしてなすこと。已むを得ずしを爲すのみ。強きを示めさんとすにあらざ。

天下を取らんとするにも我れ之れを取らんとするの意を示さば。彼亦用意する所あり。容易に結果を得ると能はず。無事の日に當り。平和の手段により。之れを取る可きのみ。戦争によりて天下を得んよりは徳に於て之れを得るを優れりとす。天下は自然の道に従ふ。故に天下を取らんとするも亦自然に従ひ。凡て圭角稜々たることをなさざること肝要なり。是れ正に老子の意なり。曰はく。

將に天下を取らんと欲して之れをなすものは吾れ其の得ざるを見るのみ。天下の神器は爲す可からざるなり。爲すものは敗れ、執るものは失ふ。凡そ物或は行き或は隨ひ或は嘘き或は吹き或は強く或は羸し或は載せ或は墜つ。之れを以て聖人甚しきを去り、奢を去り、泰を去る。終に究竟の勝利を得るなし。人と争はざ

天下を取らんとするも得べからず。神器は王位なり。王位は爲す(人爲にてなす)可らざるなり。萬物の狀一ならず。各其の自然に任ずべし。

第廿九章

凡て人と争はざり。人亦我と争ふ。終に究竟の勝利を得るなし。人と争はざれば遂に我が志を遂げ。以て全局の勝利を收むるを得。故に古言に曰はく。曲れば則ち全しと。老子は此の言を政略に應用して曰はく。

將に之れを嗜めんと欲すれば必ず固く之れを張る。將に之れを弱くせんと欲せば必ず固く之れを強くす。將に之れを廢せんと欲せば必ず固く之れを興す。將に之れを奪はんと欲せば必ず固く之れを與ふ。是れを微明といふ。柔の剛に克ち弱の強に勝つ。魚淵を脱す可からず。國の利器は以て人に示す可からず。

第十節 老子の道の哲學的解釋

以上述べたる所により老子の道は虛的無的靜的狀態なるを知る。狀態は事物の狀態なり。故に前諸節に於て諸種の事物に此の狀態の存在し而か

敵を收縮するなり。強に伐らしむ。他同意なり。柔の剛に克ち弱の強に勝つ。古語を引用せるなり。人は道を離る可からずとの意。人は國を利するは人に示す可らず。之れと同く強きを人に示す可らず。

も最も必要なるを述べたり。要するに人は此の心持を以て根本主義となす可きなり。心又は他の事物の此の状態を指して道となし。又谷神といひ又は一と稱し或は形容して樸といひ又玄牝と呼び天地の門と號し玄と命ず一にして足らず。既に一の名稱を與へ且つ抽象的に之れを心に描寫する時は之れを實在せる者の如く思ふは吾人思想の常なり。老子も亦此の弊を免れず。左の如き言あり。

道は沖にして之れを用ふ。或は盈たず。淵乎とし

解前に見ふ。

て萬物の宗に似たり。第四章 前半
谷神死せず。之れを玄牝といふ。玄牝の門之れを天地の根といふ。綿々として存せるが如し。之れを用いて勤めず。第六章

物あり混成す。天地に先ちて生ず。寂たり寥たり。獨立して而して改めず。周行して而して殆からず。

谷は虚くして低し。故に道に喩ふ。谷神は道の神なり。牝も牡に對し、道に喩ふ。道は天地の根にして存するが如く亡きが如し。

以て天下の母たる可し。我れ其の名を知らず。之れを字して道といふ。第廿五章 前半

大道は汎としてそれ左右す可し。萬物之れを恃んで以て生ず。而れども辭せず。功成りて居らず。

萬物に衣被して而して主たらず。第卅四章 前半

老子を讀む者は全體に着目することを必要とす。今引用せる言葉は實に一時の錯想に外ならざるなり。老子は道の萬象の淵源となり従つて複雑なるものとして觀察せらるゝを以て之れを形容して曰はく。

孔徳の容は惟道これ従ふ。道のものたる。惟恍たり惚たり。惚たり恍たり。其の中象あり。恍たり惚たり。其の中物あり。窈たり冥たり。其の中精あり。其の精甚だ真なり。其の中信あり。古より今に及んで其の名去らず。以て衆甫を闕ふ。吾れ

孔は大なり。恍惚は見ることなきものゝ形容。窈冥は味き貌。古より今に至る迄道あり。甫は美なり。道は衆美を闕

何を以て衆甫の然るを知らんや。此れを以てなり。

第廿一

之れを視れども見えず。名づけて夷といふ。之れを搏
を聴けども聞えず。名づけて希といふ。之れを搏
れども得ず。名づけて微といふ。此の三者は詰を
致す可からず。故に混じて一たり。其上儼なら
ず。其の下味からず。細々として名づく可からず。
また物なきに歸す。之れを無狀の狀無象の象とい
ふ。之れを惚恍といふ。之れを迎ふれども其の首
を見ず。之れを隨へども其の後を見ず。古の道を
執つて以て今の有を御すれば能く古始を知る。之
れを道紀といふ。第十四章
大象を執りて天下に往く。往いて害せざれば安平

ぶ。「此」は道を目指す
なり。
夷は平かなるなり。
希は希れなるなり。
微は微なるなり。
三字共に道の形容
詞。
「詰を致す」云々は分
別す可らざるなり。
上下の二字拘泥す
可らず。細々は多
き貌。
惚恍は道の形容詞
道の前後を見る可
らず。今の有は現
今の社會萬有の事
共なり。
道紀は道の紀綱な
り。

泰。樂と餌と過客止まる。道の言を出すこと淡乎
として其れ味なし。之れを見れども見るに足らず。
之れを聴けども聞くに足らず。之れを用ふれども
既くす可からず。第五章

大
象
を
執
り
て
天
下
に
往
く
。
往
い
て
害
せ
ざ
れ
ば
安
平
。

最後に老子は圭角を惡み。人と争ふを惡む。而かも全體の勝利を得んとす。之れを圖に表さば△とHorsとを超過して以て絶對に至らんとするなり。果然此の語を老子中に發見することを得べし。曰はく。

天下皆美の美たるを知る。斯れ惡のみ。皆善の善たるを知る。斯れ不善のみ。故に有無相生じ。難易相成り。長短相形はれ。高下相傾き。音聲相和し。前後相隨ふ。是れを以て聖人無爲の事に處し。不言の教を行ふ。萬物作して而して辭せず。生じて而して有とせず。爲して而して恃まず。功成り

て居らず。夫れ惟居らず。是れを以て去らず。

第二章

有無難易、美惡善不善、長短、高下前後等は皆相對するものなり。音聲は相對立せざれども老子の意は對立を超越せんとするにあるを以て文章を以て其の意を害すること能はず。故に老子の道とする所は名の命ず可きものなし。絶對的なり。老子は慥に絶對の觀念に到達せり。故に曰く。

道の道とす可きは常の道にあらず。名の名とす可きは常の名にあらず。無名は天地の始め、有名は

萬物の母なり。常に無以て其の妙を觀んと欲し。

常に有にして以て其の微を見んと欲す。此の兩者全じく出で、而して名を異にす。全じく之れを立

と云ふ。玄のまた玄。衆妙の門なり。

即ち老子の道は名の命ず可きなく。従つて絶對的なるものなり。然れど

指して道なりと言ひ得べきが如き者は眞正の道にあらず。眞正の道は形容し得べからず。隨て名なき者なり。微は有の由りて出る處なり。有無本一。之を玄と云ふ。玄の又玄は深きを形容せるの語なり。

も西洋の哲學者が假定する如き一の本體にあらず。唯老子は虚的無的靜的の言語を以てあらはせしにあらず。言語の域を超越し従つて絶對的なることを觀念せしのみなり。

第三章 老子の哲學 (二)

第一節 總論

上篇を精讀して而して後下篇に及ぶときは左の如き感を惹き起すべし。

(一) 下篇は一層具體的なること

(二) 下篇は一層激越なること

(三) 下篇の文章は上篇の句を多く含有すること

(四) 下篇の文章は了解し易きこと

大規如電翁は上下二篇別人の作なりと喝破せしが余も亦之に贊する者なり。下篇の根本思想は固より上篇の根本思想と異なる所なし。即ち道を以て無的狀態となす。

上徳は徳あらず。是を以て徳あり。下徳は徳を失はず。是を以て徳なし。上徳は爲すことなくして以て爲すことなし。下徳は之れをなして以て爲すことあり。上仁は之れを爲して以て爲すことなし。上義は之れを爲して以て爲すことあり。上禮は之れを爲して之れに應ずることなければ則ち臂を攘て而して之れを仍く。故に道を失て而して後徳あり。徳を失て而して後仁あり。仁を失て而して後義あり。義を失て而して後禮あり。夫れ禮は忠信の薄にして而して亂の首めなり。前識のものは道の華にして而して愚の始めなり。是を以て大丈夫は其の厚きに處して其薄きを取らず。其の實に居りて其華に居らず。故に彼れを去て此れを取る。

上徳の人は自ら徳あるを知らず。故に其の効溥し。以下此の心を以て讀むべし。

上禮の人は民の應ぜざるを見れば力を以て馴せんとす。道より禮に至る階段を設けたり。

忠信が薄くなりて亂が始まらんとするに當りて禮が起る。識者あるは世の愚となりしたるなり。

第三十

上士は道を聞いて勤めて之を行ふ。中士は道を聞いて存せるが如く亡せるが如し。下士は道を聞いて大に笑ふ。笑はざれば以て道となすに足らず。故に言を建つるに之れあり。明道は味きが如く。夷道は類しきが如く。進道は退くが如く。上徳は谷の如く。大白は辱らはしきが如く。廣徳は足らざるが如く。建徳は偷かなるが如く。質眞は渝るが如く。大方は隅なし。大器は晩成す。大音は稀聲す。大象は形なし。道は隠れて名無し。夫れ唯道は貸へて且つ成す。

第四十

第一章
含徳の厚は赤子に比す。毒虫も螫さず。猛獸も據らず。攫鳥も搏せず。骨弱く筋柔にして握ること

六四
上士は道を信じて之を行ふ。中士は道が存する如く亡きが如く考ふるなり。下士は道と爲すに足らず。昔より言へり。平なる道は區別なき故全體同じ様なり。進道は表面は退くが如く見ゆ。上徳は低き處に身を匿く。至極白きものはこれたるが如く。建徳は判然たる徳なり。誠のものは實際にはかはらざるが表面はかはる様なる趣きあり。大なる方角には隅なし。大音は稀に聲を出す。貸へるは人に與て自ら有とせざる

固し。未だ牝牡の合するを知らず。而して鯁作るは精の至りなり。終日號べども噬して頃せざるは和の至りなり。和を知るを常と曰ひ。常を知るを明と曰ふ。生を増すを祥と曰ひ。心氣を使ふを強と曰ふ。物壯なれば則ち老ゆ。之れを不道と曰ふ。不道は早く已めよ。

第五十

第一章
知つて知らざるは上なり。知らずして知るは病なり。それ只病を病とす。是を以て病まず。聖人は病まず。其の病を以て病めるなり。是を以て病まず。

天下の柔弱は水より過ぎたるはなし。而して堅強を攻むるものは之れによく勝つことなし。其れ以て之れより易きはなし。弱の強にから。柔の剛に

第三章 老子の哲學

なり。有道の者然りとす。鯁は赤子の血のよく回るとなり。頃は聲の枯るゝを云ふ。精氣の盛んなるを云ふなり。和は心の和けるためなり。生は生命なり。知るも知らざる如きを宜しとす。知らずして知れりとするは病なり。病は輕き意味なり。病を病とすとは病を厭ふなり。「之れより」は「水」を指すなり。

勝つ。天下知らざるなけれどもよく行ふことなし。故に聖人云く。國の垢を受く。之れを社稷の主と云ふ。國の不祥を受くる。之を天下の王と云ふと。

國の垢とすること。人を身に受く。人の嫌ふ位置に當る。此れ等は正言なり。故に常の道に反する如くに見ふ。

正言は反するが如し。第七十 八章

是れ等の引用文に由りて下篇の根本思想は無的状态にして上篇と全く異なるを見るべきなり。但だ時に異なるものあり。今一々之を述べん。

第二節 宇宙論

無的状态は上篇にありては全體より見れば單に一の状態にして形容に外ならず。然るに下篇に在りては無的状态は一の無即ちNothingと見做されたる所多し。宇宙の無より生ずとなす者は是れなり。第四十章に曰はく。

反は道の動。弱は道の用。天下の物は有に生じ。有は無に生ず。

解前に見ふ。

此れ列子天瑞篇宇宙生成論と正さに同き者なり。何ん人も此の考を有す。即ち普通の哲學思想を代表せる者と謂ふべきなり。又曰はく

道之れを生じ。徳之れを蓄へ。物之れを形し。勢之れを成す。是を以て萬物道を尊び而して徳を貴ばざることなし。道の尊き徳の貴き其れ之れを命ずることなし。而して常に自ら然り。故に道之れを生じ。之れを蓄へ。之れを長じ。之れを育ひ。之れを成し。之れを熟し。之を養ひ。之れを覆ふ。生して而して有とせず。爲して而して恃まず。長じて而して宰らず。是れを玄德と謂ふ。第五十一 一章

然らば之れを生ずる順序如何と云ふに。曰はく

道一を生じ。一二を生じ。二三を生じ。三萬物を生ず。萬物陰を負ふて而して陽を抱く。冲氣は以

一は太極。二は天地。三は天地人三才。萬物は陰陽にて生ず。

て和することゝをなす。人の惡む所はたゞ孤寡不穀。而るを王侯以て利となす。故に物或は之れを損し。而して益し。之れを益して而して損す。人の教ゆる所は亦我れ義として之れに教ゆ。強梁ツバシツバシなるものは其の死を得ず。我れ將に以て教父たらんとす。

第二章 第四十

一とは太極、二とは天地、三とは三才。是れ林希逸の註なり。是れ當時其説ありて以て之れを籍れるなり。殊に陰陽の説は易に本く。然らば此の一句易を以て解するを以て是とすべきが如し。但だ其の陰を負以陽を抱くとなすの説は他に本くあるにあらず。萬物の根柢は陰にして柔、表面は陽にして剛なりとの獨斷説に外ならざるなり。是の一章は老子の易に籍る所。然れども老子全體を以て易に出づとなすは早計たるを免れず。

調和氣は陰陽の氣を
不殺はよからぬも
我が身に置きて利益あり
方人が得るに於て利あり
他人の教ふ理と各
し正當なる義と
實然の能はざる
なり然るに強梁なる
得るは其の死を得ず
我れ各に我れを
の教父たり世を教ふる

第三節 倫理論

下篇は倫理を以て漸次に進化せるものとなせり。即ち太古は渾沌として何等の指摘すべきなく而して自ら有徳の状態なりしが其の後に及び仁義の如き禮の如き繁鎖なる名目を生ずるに至れり。曰はく。

解前に見よ。

上徳は徳あらず。是を以て徳あり。下徳は徳を失はず。是を以て徳なし。上徳は爲すことなくして以て爲すことなし。下徳は是れをなして以て爲すことあり。上仁は之れを爲して以て爲すことなし。上義は之れを爲して以て爲すことあり。上禮は之れを爲して之れに應ずることなければ則ち臂を攘て而して之れを仍く故に道を失つて而して後徳あり。徳を失て而して後仁あり。仁を失て而して後

義あり。義を失て而して後禮あり。夫れ禮は忠信の海にして而して亂の首めなり。前識の者は道の華にして而して愚の始めなり。是を以て大丈夫は其厚きに處して其薄きに居らず。其實に居りて其華に居らず。故に彼れを去て之れを取る。第三十是れ禮其者を以て世を亂るの具となすにあらず。世亂れて後已むを得ずして此の具を作り以て天下を治むるものありとなすなり。故に又曰はく。大道廢れて仁義あり。智慧出でて大偽あり。六親和せずして孝慈あり。國家混亂して忠臣あり。

第十

此の句は下篇に入るべき者なり。國家の未だ昏亂せざる誰れか忠不忠を分たんや。昏亂するに及び始めて忠臣の名あり。是れと同じく六親和せざるに及び始めて孝慈の名を立つ。而して殊更に孝慈と名くべき行為あり。

り。人智の發達するに及び大偽をなす者あり。彼の仁義と稱すべき行為の存在する已に大道の廢れたるを知るなり。

是の故に人民をして私少く欲寡からしむれば則ち古代淳樸の状態に復歸するを得。老子は單に絶聖棄智絶仁棄義絶巧棄利と云ふ。此くの如くなれば則ちよく私少く欲寡しとなすなり。曰はく。

聖を絶ち智を捨て民利百倍す。仁を絶ち義を捨て、民孝慈に服す。巧を絶ち利を捨て盜賊あることなし。

此の三者云云は不明なり。

し。此の三者以て文にして足らずとなす。故に屬する所ありて素を見機を抱き私少く欲少なからしむ。

第十

「絶棄とは何の謂ぞや。二様に解すべし。名目を廢すると思想を廢すると是れなり。單に名目を廢するも人は仁義聖智巧利を忘るゝに至る。後の意味にすれば此れ等の思想を脱却せよ。即ち天下淳樸なりとなり。是

れ等二説は矛盾せざるのみならず。第一説は第一步にして第二説は第二歩たるなり。然れども老子の此の説たる實行す可からざる者なり。何んとなれば時勢の進歩は人心をして複雑ならしめ且つ是れ等の思想を生じたるなれば時勢を挽回するの神策あるにあらざるよりは單に名目を廢するも又は單に思想を絶つべしと云ふも其れ克くし得る所にあらざるなり。

第四節 萬物論

一切萬物有靈無靈を分たず皆道を以て根本となす。其の能く其の物たる所以の者は道を體するを以てなり。曰はく

昔の一を得る者は天一を得て以て清く。地一を得て以て寧く。神一を得て以て靈なり。谷一を得て以て盈つ。萬物一を得て以て生ず。王侯一を得て以て天下の貞たり。其の之れを致す一なり。天以

一は道なり。萬象道に由りて以て其の用をなす。

貞は中心。

て清きことなくんば將に裂れんことを恐れんとす。地以て寧きことなくんば將に以て發せんことを恐れんとす。神以て靈なることなくんば將に歇まんことを恐れんとす。谷以て盈つることなくんば將に竭きんことを恐れんとす。萬物以て生ずることなくんば將に滅せんことを恐れんとす。侯王以て貞たることなくんば貴高將に歴かんことを恐れんとす。故に貴は賤を以て本となし高きは下きを以て基となす。是を以て侯王自ら孤寡不穀と稱す。これ其の賤を以て本とするなるか。非なるか。故に車を數ふることを致せば車なし。珠々として玉の如く落々として石の如くなるを欲せず。

第三十

「發す」は動くなり。人は身を賤下せざる可らず。侯王の孤寡不穀などと卑き名を用ふる所以なり。

車の局部々々を分解して見るときは車の用なし。全體統一して始めて其用あり。あるが如くなきが如き譬なり。玉や石や一定の形あり。道は此くの加くなる可らず。

人事界に付ては能く其論據をも發見し得るも天然界に付ては發見する能はず。畢竟一の獨斷に外ならず。又萬物は道によりて生ぜられ其行動一々道によりて司配せらるゝを述べて曰はく。

解前に見よ。

道之れを生じ。徳之れを蓄へ。物之れを形し。勢之れを成す。是を以て萬物道を尊び。而して其徳を貴ばざるとなし。道の尊き。徳の貴き。其れ之れを命ずることなし。而して常に自ら然り。故に道之れを生じ。之れを蓄へ。之れを長じ。之れを育ひ。之れを成し。之れを熟し。之れを養ひ。之れを覆ふ。生じて而して有とせず。爲して而して恃まず。長じて而して率らず。是れを玄德と謂ふ。

第五十一

山是觀之。萬物は皆無より生じ而して無なる道によりて司配せられ居

るなり。上篇は單に萬物の無的狀態なるを云ふ。下篇は道の萬物に於ける至らざるなく在らざるなく普遍々満なるを言ふなり。故に上篇は萬物に無的狀態を發見したるのみ。下篇は道の活働的積極的なるを述ぶ。然も無に歸するに此の活働を以てするは其の思想の幼稚なるを見る。唯だ無なるものが如何にして能く活働し得るや了解する能はざるなり。

第五節 政治論

政治は人君の行ふ所是を以て人君の心事を述ぶる者甚だ多し。人君は己を謙し身を卑きに置かざる可からず。則ち能く天下の中心たるべし。曰はく。

民威を畏れざれば大威至る。其居る處を狭くすること無かれ。其生ずる處を厭ふこと無かれ。夫れ惟だ厭はず。是を以て厭はず。是を以て聖人は自

威を畏れざるは刑を畏れざるなり。果して然らば大に刑せらるるもあり。人は自身の居る處を狭からしむるも

ら○知○て○自○ら○見○ず○。自○ら○愛○し○て○自○ら○貴○ば○ず○。故○に○彼○
れ○を○去○て○此○れ○を○取○る○。第二章 江○海○の○よ○く○百○谷○の○王○た○る○所○以○の○も○の○は○其○善○く○之○れ○
に○下○る○を○以○て○な○り○。故○に○よ○く○百○谷○の○王○た○り○。是○を○
以○て○聖○人○は○民○に○上○た○ら○ん○と○し○。必○ず○言○を○以○て○之○れ○
に○下○る○。民○に○先○た○ら○ん○と○欲○し○て○必○ず○身○を○以○て○之○れ○
に○後○る○。是○を○以○て○聖○人○は○上○に○處○れ○ど○も○而○も○民○重○し○
と○せ○ず○。前○に○處○れ○ど○も○而○も○民○害○と○せ○ず○。是○を○以○て○
天○下○推○す○こ○と○を○樂○ん○で○而○し○て○厭○は○ず○。故○に○天○下○よ○
く○之○れ○と○争○ふ○こ○と○な○し○。第六章 故○に○貴○は○賤○を○以○て○本○と○な○し○。高○は○下○を○以○て○基○と○な○
す○。是○を○以○て○侯○王○自○ら○孤○寡○不○殺○と○稱○す○。こ○れ○其○賤○
を○以○て○本○と○す○る○か○非○な○る○か○。故○に○車○を○數○ふ○こ○と

勿○れ○。無○の○道○に○據○
れ○ば○大○に○廣○か○る○べ○
き○な○り○。居○る○處○、生○
ず○る○所○必○ず○し○も○拘○
は○ら○ず○。

前○に○處○る○は○單○に○文○
章○の○形○容○な○り○。

を○致○せ○ば○車○な○し○。碌○々○と○し○て○玉○の○如○く○落○々○と○し○て○
石○の○如○く○な○る○を○欲○せ○ず○。第三十九章

人○君○卑○さ○に○居○る○。此○心○地○こ○そ○天○下○を○治○る○に○必○要○な○れ○。

故○に○又○曰○は○く○。

天○下○の○柔○弱○は○水○よ○り○過○ぎ○た○る○は○な○し○。而○し○て○堅○強○
を○攻○む○る○も○の○は○之○に○よ○く○勝○つ○こ○と○な○し○。其○れ○以○て○
之○れ○よ○り○易○き○は○な○し○。弱○の○強○に○か○ち○柔○の○剛○に○勝○つ○
天○下○知○ら○ざ○る○な○け○れ○ど○も○。よ○く○行○く○こ○と○な○し○。故○
に○聖○人○云○く○。國○の○垢○を○受○く○。之○れ○を○社○稷○の○主○と○云○
ふ○。國○の○不○祥○を○受○く○る○。之○を○天○下○の○王○と○云○ふ○。正○
言○は○反○す○る○が○如○し○。第七十章
人○を○治○め○天○に○事○ふ○る○は○畜○に○如○く○は○な○し○。夫○れ○唯○畜○
な○り○。是○を○以○て○早○く○復○す○。早○く○復○す○。之○を○重○積○德○
と○謂○ふ○。重○積○德○は○則○ち○克○せ○ざ○る○こ○と○な○し○。克○せ○ざ○

畜○は○畜○の○畜○に○し○
て○餘○り○あ○り○て○之○を○
用○ひ○ざ○る○の○意○な○り○。
早○く○復○す○は○早○く○道○
に○復○す○る○な○り○。

ることなければ則ち其の極を知ることなし。其の極を知ることなければ以て國を保つべし。國を保つのは以て長久なるべし。是れを根を深くし根を固くすと云ふ。長生久視の道なり。第九章

母は養なり。國を保つ所以の養をなせば長久なるべし。久視は久視して瞬せざるなり。

是れ國と國との間に於ても亦同じ。大國を以て小國に事へなば則ち能く小國を合すべく。小國を以て大國に事へなば則ち能く大國を取るべきなり。

大國は下流す。天下は天下の牝に交る。牝常に静なるを以て牡に勝つ。静かなるを以て下となす。故に大國以て小國に下るときは則ち小國を取る。小國以て大國に下るときは則ち大國を取る。故に或は下りて以て取り。或は下りて大國を取る。以て人を兼ね善ふに過ぎず。小國は入りて人に事ふる

大國は下流に立つを以て主となす。天下の雌雄を決せんとするや、牝性の者常に勝つ。天下の牝は天下の尤も牝性の者なり。大國の望む所は人を兼ね善ふに在り。小國の望む所は入りて人に事ふるに

を欲するに過ぎず。夫れ兩者各其欲する所を得。

在り。

故に大なるもの須らく下となるべし。第六十一 大國を治むるは小鮮を養るが如し。道を以て天下に滋めば其鬼神ならず。其鬼神ならざるにあらず。其の神人を傷はず。其の神人を傷はざるにあらず。聖人も亦傷はず。夫れ兩つながら相傷はず。故に

徳交々歸す。第十章

小鮮を養るに妄りに攪すれば碎く。國を治むるも亦然り。無爲を尙ふなり。道を以て天下に臨めば鬼は鬼神は神人は人、聖人は聖人、各々其の職ありて相ひ侵犯せず。各々其の徳を有するなり。

聖人の人民を見るや恰も小兒の如し。其の心のまゝにし機に應じ理に循て之れを指導す。聖人私心を挾まず。只管百姓の心を以て心となす。曰はく。

聖人は常の心なし。百姓の心を以て心となす。善なるものは我れも亦之れを善とし。不善なるものは我れも亦之れを善として善を得。信なるものは我

我は常に善信を以て人に對す。則ち我が善信の徳を全

れ之れを信とす。不信なるものも我また之れを善として信を得。聖人の天下にあるは慄々として天下のために心を渾にす。百姓皆其の耳目を注ぐ。聖人皆之れを孩にす。 第四十 九章

人民を刑するも亦唯其の自然に任ずべきのみ。曰はく。

民死を恐れずんば奈何んぞ死を以て之れを懼れしめん。若し民をして常に死を恐れしめて而して奇をなすものは。我れ執ふるとを得て之れを殺さば孰れか敢てせんや。常に司殺のものありて殺すなり。夫れ司殺のものに代りて殺す。是を大匠に代りて断るといふ。夫れ大匠に代りて断るものは手を傷けざることをある稀なり。 第七十 四章

蓋し天下の治め難き、人民の智多きに在り。人民智なければ事なく。而

なり。
「慄々」は痛む貌。渾は渾然として圭角を露はさざるなり。

奇は人に異りたるをなすもの。
司殺の者は造物主なり。
自然の理にもとりて殺す。

して天下治まり易し。人主人民の智識を増加せんとして辛苦するが如きは政治の要道に反するなり。曰はく。

古のよく道を爲むるものは以て民を明にするにあらず。將に以て之れを愚にせんとす。民の治め難きは其の智の多きを以てなり。智を以て國を治るは國の賊なり。智を以て國を治めざるは國の福なり。此の兩者を知るは亦楷式なり。善く楷式を知る。之れを玄徳といふ。玄徳は深きかな。遠きかな。物と反せり。即ち大順に至る。 第六十 五章

楷式は法則なり。此の兩者を知る者は天下の法たるべし。物と反せりとは物と一處に其の初めに復するなり。大順は自然なり。

其の理想的社會は實に古代に存す。即ち民は舟輿あるも乗ずることなく、甲兵あるも用ふることなく、其の食と居とに安んじ、浪々乎として無智なるものは是れのみ。曰はく

小國寡民は什伯人の器ありて而して用ひられざらしむ。民をして死を重んじて而して遠く徙らざらしむ。舟輿ありと雖も乗ずる處なし。甲兵ありと雖も陳ぬる處なし。民をして復繩を結ひて而して之れを用ゐしめ。其の食を甘しとし。其服を美なりとし。其居を安んじ。其の俗を樂しむ。隣國相望み。鶏狗の聲相聞え。民老死に至るまで相往來せず。第八章 十章

有道の人小國寡民を得る時は千人の長となり百人の長となる器あるものも朝に事へてよき官を得んとはせざるなり。結繩は古代の風なり。最後の三句は古代純朴の社會の形容。

人君たるもの、理想如何を問はゞ則ち一見不肖の如く、而して「慈」と「儉」と「不敢爲天下先」との三徳を備ふる是れのみ。曰はく。

天下皆謂。我れ大に不肖に似たりと。夫れ惟大なるが故に不肖に似たり。若し肖とせば久しいかな。其れ細なり。我れに三寶あり。寶として之れを持

「若し肖とせば」は若し肖像する者ありとせばなり。細なりは細人なり

す。一に曰はく慈。二に曰はく儉。三に曰はく敢。ゑて天下の先きとならず。慈なるが故に能く勇なり。儉なるが故によく廣なり。敢て天下の先とならず。故によく器の長を成す。今慈を捨て、且つ勇なり。儉を捨て、且つ廣なり。後を捨て、且つ先なり。死せるかな。夫れ慈にして以て戦へば則ち勝ち。以て守れば則ち固し。天將に之れを救ふに慈を以て之れを衛らんとす。第六十章 七章

の意。久しいかなは已に久しくの意。儉は收斂なり。廣は開豁なり。心を小にするが故に開豁となる。器は地球にあるものなり。「今」以下は當時の人を指す。死の道なるかなの義なり。戦ふは物と交るなり。天の之れを救うに當りて我れ慈を以て此の身を衛らんとするの意なり。

政治の人民に於ける影響甚だ大なり。曰はく。

正を以て國を治め。奇を以て兵を用ひ。事無きを以て天下を取る。我れ何を以て其の然るを知らんや。此れを以てなり。夫れ天下忌諱多く。而して

此を以ては道を以てなり。

民彌貧し。人利器多く。國家滋昏し。民に技巧多く。奇物滋起る。法令滋彰はれ。盜賊多くあり。故に聖人云はく。我れ無爲にして。民自ら化し。我れ静を好んで。而して民自ら正し。我事なくして。而して民自ら富み。我れ欲なくして。而して民自ら樸なり。

第七十

其の政悶々なれば。其民醇々。其の政察々なれば。其民缺々。禍は幸の倚る處。幸は禍の伏す所。誰れか其の極を知らん。それ正なからんか。正また奇となり。善また妖となる。民の迷ふこと。其の日固より既に久し。是を以て聖人は方にして割かず。廉にして測かれず。直にして而して肆びず。光ありて而して耀かず。

第八十

政府の禁ずること多きを云ふなり。人々拘束せらるる。故に利器は刃物なり。民之を弄び。國家昏き所以なり。法令の末を以て天下を治めんとするは非なり。

悶々には明かならざるなり。缺々として缺くる。天下の循環する多きを云ふ。方にして方ならず。四方の角なきなり。聖人は一點を取り。範圍を超脱したる。其ものなるを云ふ。以下皆同じ心なり。

又時勢に付て言をなして曰はく。

我れをして介然として大道に知行あらしむ。唯施して是れ畏る。大道は甚夷にして。而して民徑を好み。朝は甚だ除れども。田は甚だ蕪せり。倉は甚だ虚しけれども。文彩を服し。利刃を帯び。飲食に飽き。資財餘りある。之れを盜誘と云ふ。道にあらざるかな。

第五十

民の飢ゆるは其の上食税の多きを以てなり。是を以て飢ゆ。民の治め難きは其の上の爲る事あるを以てなり。是を以て治まり難し。民の死を輕んずるは其の生を求むるの厚きを以てなり。是を以て死を輕んず。夫れ只生を以てするなきものは。是れ生を貴ぶにまされり。

第七十

介然は固くして化せざるの貌。大道を知行するに至れる者にあらず。此の如くなれば。施爲する所皆畏るべきなり。朝は朝廷なり。盜誘は盜むて而して誘るなり。

第六節 處世論

處世の法も亦固より卑きに居るを以て第一の心掛となすべし。若し自ら卑しきに居れば則ち大利を得べく、然らずして己れ自ら高きに居り厚く自ら封殖すれば則ち人々己れを去り己れは大利を得ること能はず。故に曰はく。

解前に見ふ。

唯孤寡不穀。然るを王侯以て稱とす。故に物或は之れを損して而して益し。之れを益して而して損

す。第四十

人の己れを持する須らく消極的なるべし。貨財を愛すること甚しければ之れを失ふことあり。多く藏せんとすれば必ず之れを亡ふことあり。故に欲望を少くし、自ら足れりとなし進んで厭くなく人と争ふて已まざるが如きことある可らず。曰はく

名身といづれか親しき。身貨といづれか多き。得ると亡ふといづれか病ましき。此故に甚だ愛すれば必ず大に費やす。多く藏すれば必ず厚く亡ふ。

身體の最も大切なること明かならん。

足ることを知れば辱められず。已むことを知れば殆からず。以て長久なるべし。第四十

天下道あれば走馬を却けて以て糞す。天下道なければ戎馬郊に生ず。罪は可欲より大なるはなし。禍は足るを知らざるより大なるはなし。咎は得んと欲するより大なるはなし。故に足ることを知るの足るは常に足れるなり。第四十

天下始めあり以て天下の母となる。已に其母を得て以て其の子を知る。既に其の子を得て復た其の母を守る。身を没するまで殆からず。其の死を塞

走馬を軍に使用せずして田に用ひて肥料を施さしむ。郊に生ずは軍馬となるなり。可欲は欲心を言ふ。足るを知りて足れりとせる人は常に足りたるの人なり。

第三節 老子の哲學

天下始めあり(原因)とすれば夫れより萬物生ず(結果)

ぎ。其の門を閉づ。身を終るまで勤めず。其の発
を開き。其の事を濟す。身を終るまで救はれず。
小を見るを明と云ひ。柔を守るを強と云ひ。其の
光を用ひて復た其の明に歸す。身の殃を遺すと
し。是れを襲常といふ。第二章

根本の母にかへり
其の道を守るなり。
発は口なり。
道に従ふなり。襲
は威なり。常は不
易なり。不易の道
を蔵するなり。

是の故に人は畢竟無をなすべきのみ。人と交るに當り、己れを卑きに置
くべし。隨て怨みある者と雖も、之れに報ずるに怨みを以てすべからず。
徳を以てすべし。則ち怨みある者も來りて吾がためを計るべし。凡そ事
は心を静かに細察し、勞少くして効多き機に臨み、變に應ぜざる可らず。
則ち能く大業をなすべきなり。人の己れに依頼することあるも、輕しく之
を諾す可らず。輕く諾するも、徒らに身心を勞して、効なきこと少からず。
心を無にして、事の是非を考察し、而して後之を諾すべく。難事に際するも
亦當さに此の心持にて爲すべきのみ。事を其の初めに察し、大事に至らし

めず。是を以て爲すなきが如きなり。曰はく。

無爲を爲し。無事を事とし。無味を味ふ。大小多
少怨に報ゆるに徳を以てす。難を圖るに其の易き
に於てし。大を爲すに其の細に於てす。天下の難
事は必ず易に作り。天下の大事は必ず細に作る。
是を以て聖人遂に大を爲さず。故によく其の大を
爲す。夫れ輕しく諾するものは必ず信寡し。易き
事多ければ必ず難き事多し。是を以て聖人猶之れ
を難んず。故に遂に難き事なし。第三章
其の安きは持ち易く。其の未だ兆さざるは謀り易
し。其の脆きは破れ易し。其の微なるは散し易し。
之れを未だ有らざるになし。之れを未だ亂れざる
に治む。合抱の木は毫末より生じ。九層の臺は累

無爲を爲すは即ち
無爲の爲なり。以
下皆同じ。

聖人は如何なると
にも注意し侮らず。
困難なる如くする
なり。

安きは天下安泰な
るなり。持ち易く
は維持なし易きな
り。安平の時に當
りて維持の法を講
ずれば則ち易し。

土より起り。千里の行も足下より始まる。爲すものは之れを敗り。執るものは之れを失ふ。聖人は爲すことなきが故に破るゝことなし。執ることなきが故に失ふことなし。民の事に従ふ常に幾んどなるに於て而して之れを敗る。終りを慎むこと斯の如くなれば則ち事を敗ることなし。是を以て聖人は欲せざるを欲す。得難きの貨を貴びず。學ばざるを學ぶ。衆人の過る所に復して以て萬物の自然を輔く。而して敢て爲さず。第六十 四章

誰かよく餘りありて以て天下に奉ぜん。只有道のものなり。是を以て聖人は爲して而して恃まず。功なりて居らず。夫れ賢を見はすを欲せず。第七十七 章後半

徳を以て徳に報ずる已に前に述べたり。然れども此の如きは猶人を得

殊更に爲さんとし、殊更に執らんとする者は失敗す。

衆人の過る所は衆人の過ぎ去る所。即ち衆人の欲せざる所なり。

んとするの心あり。即ち能く大なること能はず。必らずや怨を忘れ吾が心を無にし而して後大に爲すべきのみ。曰はく。

大怨を和すれば必ず餘怨あり。安んぞ以て善たるべき。是を以て聖人は左契をとりて而して人に責めず。有徳は司契。無徳は司徹。天道は親しむことなし。常に善人に與す。第七十 九章

大怨を和せば必ず餘怨あり。安んぞ以て善たるべき。是を以て聖人は左契をとりて而して人に責めず。有徳は司契。無徳は司徹。天道は親しむことなし。常に善人に與す。

凡そ世間に就て觀察するに言の信ある者は美ならず。信なし。辯に任せて滔々たる者は必らず其の内容に於て善ならず。而して辯ならざる者は卻て善なるなり。凡て之れと同じ。無なる心持よりするときは其の結果必ず多し。故に曰はく。

知るものは言はず。言ふものは知らず。其の免を塞ぎ其の門を閉ぢ其の鋭を挫き其の紛を解き其の

美なる者は則ち

光を和らげ、其塵に同じうす。之れを玄同と謂ふ。得て而して親しむべからず。得て而して疎んずべからず。得て而して利すべからず。得て而して害すべからず。得て而して貴ぶべからず。得て而して賤しむべからず。故に天下の貴たり。第五十六章 信言は美ならず。美言は信ならず。善なるものは辯ならず。辯なるものは善ならず。知るものは博からず。博きものは知らず。聖人は積まず。既に以て人の爲にす。己れ愈有す。既に以て人に與ふ。己れ愈多し。天の道は利して而して害せず。聖人の道は爲して而して争はず。第八十章

塵は光なきものなり。光なき方に同ふするなり。

博きは博物なり。眞知の人は博物の人にあらず。聖人の道は虚のみ、積むにあらず。

人に利を與へて人を害することなし。

山是觀之。如何なる人と雖も道を修めざる可らず。曰はく。

道は萬物の奥。善人の寶。不善人の保つ處。美言

奥は蘊奥なり。善人不善人皆據る。

以て市るべく。尊行以て人に加ふべし。人の不善なる。何の棄つるか之れあらん。故に天子を立て。三公を置く。拱壁以て駟馬に先づることありと雖も座ながら此の道に進むに如かず。古の此の道を學ぶ所以のものは何ぞや。求めて以て得罪ありて以て免るといはずや。故に天下の貴きたり。第十六章

市るは人を悦ばしむるなり。人に加ふは人の上に加ふるなり。拱壁以て駟馬に先づは賢を聘するの禮なり。此くして招かるより道に進むに如かず。道は求むれば則ち得。罪あるも免るを得るなり。

而して道を修むる人に由りて區別あり。曰はく

上士は道を聞て勤めて之れを行ふ。中士は道を聞て存せる如く亡せる如し。下士は道を聞て大に笑ふ。笑はざれば以て道となすに足らず。故に言を建つるに之れあり。明道は味が如く。夷道は類しきが如く。進道は退くが如く。上徳は谷の如く。

道は存するが如くなきが如く考ふ。下士が笑ふ位でなくば道とするに足らず。昔より言へり。平なる道は區別なき故同し様なり。表面は退く如く見ゆ。上徳は低き處に身

正しきを以て國を治め、奇を以て兵を用ひ、事なきを以て天下を取る。

第五十七 章初三句

孫子曰はく。

凡そ戦は正を以て合し、奇を以て勝つ。故に善く奇を出す者は無窮なること天地の如く。竭きざること江海の如し。終りて復始まる。日月是れなり。死して復生ず。四時是れなり。

其思想相同じと謂ふべきなり。蓋し當時一般の輿論たりしなり。孫子又曰はく。

將其の忿に勝へず。而して之れに蟻附すれば士卒三分の一を殺して而も城抜けざる者此れ攻むるの災なり。

忿りて奮進するは圭角を露はす所以にして破るゝ所以なり。而して老

子も亦曰はく。

善く士たるものは武ならず。善く戦ふものは怒らず。善く勝つものは與もにせず。よく人を用うるものは之れが下なり。之れを争はざるの徳といひ。之れを人を用うるの力と云ひ。之れを天に配すと云ふ。古の極なり。

第六十八 章

與もにせずは物と對せず。我を絕對の域に置くなり。

是れ亦相似たりと謂ふ可し。又兵を用ふるや、敵の形に應ぜざるべからず。而して成るべく退却をことせざる可らず。而も敵を輕んずることなく、慎重の態度を以てせざる可からず。曰はく。

兵を用ふるに言あり。我れ敢て主たらずして而して客たり。敢て寸を進まざして而して尺を退く。之れを行いて行くことなく。攘て臂することなく。仍くに敵なく。執るに兵なしと謂ふ。禍は敵を輕

實際臂を攘へるも攘はざる如く見ゆるなり。實は兵器を執れるも然らざる如く見ゆ。

んずるより大なるはなし。敵を輕んずれば幾んど吾が寶を喪ふ。故に兵を抗して相加ふ。哀れむものは勝てり。第六章 九章

退却をこととする外は新思想なきなり。又曰はく

敢てするに勇なるときは即ち殺す。敢てせざるに勇なるときは即ち活く。この兩の者は。或は利或は害。天の惡む所。誰れか其の故を知らん。是を以て聖人は尙ほ之れを難んず。天の道は争はずして而して善く勝ち。言はずして善く應へ。召さずして而して自ら來す。坦然として而して善く謀り。天網恢々。疎にして而して失はず。第七章 三章

是れ必ずしも兵を言ふに非ざれども亦以て兵に應用すべきなり。

相加ふは戰ふなり。哀は兵を用ふるを好まずして慎重の態度をとるとなり。

自分の身を殺す。一方は利一方は害なり。天の惡む所は敢てするを惡むなり。誰れか其の故を知らむや。恢々一句は大ざつばなるも如何なる者をも其の所を失はしむるとなきを謂ふなり。

第八節 人格論

人は道德に循由せざる可らず。乃ち立徳を有する者は謙虚にして己れ無なるが如し。即ち其の容貌自ら赤子の如し。物と争はず。故に害せらるゝことなし。毒虫と雖も害することなく、攫鳥と雖も撃つことなし。曰はく。

解前に

含徳の厚きは赤子に比す。毒虫も螫さず。猛獸も據らず。攫鳥も搏たず。骨弱く筋柔にして而して握ること固し。未だ牝牡の合するを知らず。而して鯨起るは精の至りなり。終日號べども噬して而して啜れず。和の至りなり。和を知るを常と云ひ。常を知るを明と云ひ。生を増すを祥と云ひ。心氣を使ふを強と云ふ。物壯なれば則ち老ゆ。之れを

不道と云ふ。不道は早く已めよ。第五十
 此の思想は當時に多く之れありし如し。一種湊合的思想にして科學的
 にあらず。換言すれば赤子の無意識的な状態は全く物と關することな
 きが如くに觀念し、從て超越的對絶的なるが如くに思ふなり。列子中にも
 亦之れに類したる言あり。即ち

道を得たるものは火に入るも焼かるゝことなく。
 水に入るも溺るゝことなし。

となす。老子又曰はく。

生を出て、死に入る。生の徒十有三。死の徒十有
 三。民の生は動もすれば死地に之く。亦十有三。
 其れ何の故ぞ。其の生々の厚きを以てなり。蓋し
 聞く。善く生を攝シテふものは陸行して兕虎に遇はず。
 軍に入りて甲兵を被らず。兕も其の角を投ずる所

十三なる数は天の
 始終なり。之に二
 を加ふ。十三を得
 十三は即ち一なり。
 一は機なり。死す
 るも生くるもはず
 みなりと云ふなり。
 命を惜しむことの
 厚き。
 道を養ふものは虚

なく。虎も其の爪を措く所なし。兵も其の刃を容
 るゝ所なし。其れ何の故ぞ。其の死地なきを以て
 なり。第十
 此れ等は上篇に於ては見る可らざりし所の思想なり。

的無的靜的なるが
 故に死するの機な
 きなり。

第九節 老子の道の哲學的解釋

老子の根本思想は無なり。無的狀態が能く一切の大事をなすに足る。
 無的狀態は心をして無なる如くならしむるなり。無と云へば有の反對に
 して、下、空、静、缺、乏、屈、拙等の概念と相近しとなす。是れ漠然たる聯想なり。
 此れ等の概念は何人にとりても無と聯想し得るにあらず。唯此れ等の概
 念は其の相對として、尊、上、實、動、全、餘、伸、巧等の概念を有す。今無と有とを以
 て相對せるものとなし。夫等概念を兩者のいづれにか配當せんとすると
 きは。前者は無に近く。後者は有に近し。單に近しと云ふのみにして、嚴

密なる聯想あるにあらず。老子は無は有の根本なりと云ふ思想を此れ等相對の概念にも應用せり。曰はく。

大成は缺けたるが如し。其の用徹へず。大盈は冲しきが如し。其の用窮らず。大直は屈せるが如し。大巧は拙なるが如し。大辯は訥なるが如し。躁勝つときは寒し。静勝つときは熱す。清静は天下の正たり。第四十 五章

天下の柔弱は水より過ぎたるはなし。而して堅強をせむるものは之れによく勝つことなし。夫れ以て之より易きはなし。弱の強にかち柔の剛に勝つ。天下知らざるなけれどもよく行くことなし。故に聖人云く。國の垢を受く。之れを社稷の主と言ふ。國の不祥を受くる。これを天下の王と言ふ。正言

敵へずは盡きずの如し。躁は陽氣なり。静は陰氣なり。清静は一偏ならざるを云ふ。

國の垢とすること身を受く人の嫌う位置に當る。

は反するが如し。第八十 七章

又曰はく

反は道の動。弱は道の用。天下のものは有に生じ。

有は無に生ず。第四十 十章

反は復へるなり。静かなるなり。道の動き得る所以。弱きは道の其の作用をなす所以。

何事によらず無的状态なるものは即ち大成するとなすなり。又之れを人間の行爲に應用すれば則ち曰はく。

天下の至柔は天下の至堅に馳騁す。無有は無間に入る。是を以て無爲の益あることを知るなり。不言の教無爲の益天下之れに及ぶこと稀なり。第十三 三章

至柔なる者は至堅なる者の間に馳騁するを得。無間は縫罅なきなり。無なる者は如何なる處にも入り得。道に喩ふるなり。

之れを人の心に應用すれば則ち無的状态は心を沈静にし直覺的内省的の状態なり。而かも我が無的状态の廣大なるを感じつゝあるが故に宇

雷の萬象應々として映じ来るが如き心地す。故に曰はく。

戸を出てずして天下を知り。牖を窺はずして天道を見る。其の出づること愈遠ければ其の知ること愈少し。是を以て聖人は往かずして知り。見ずして名づけ。爲さずして而して成る。第七十

出る愈々遠きは精神を勞する愈々多きなり。

老子は又之れを天に應用し、天の心なりとして述べて曰はく。

天の道は争はずして而して善く勝ち。言はずして而して善く應へ。召さずして而して自ら來す。坦然として而して善く謀り。天網恢々として疎にして失はず。第三十七

又曰はく。

天の道は夫れ猶張れる弓の如きか。高さものは之れを抑へ。下きものは之れを擧ぐ。餘りあるもの

張れる弓は元の如く弛まんとするなり。

は之れを損し。而して足らざるを補ふ。人の道は則ち然らず。足らざるを損して而して餘りあるを奉ず。孰れか能く餘りありて以て天下に奉ぜん。唯有道のものなり。是を以て聖人は爲して恃まず。功成りて處らず。夫れ賢を見はすを欲せず。第七

此れ天の人の高きに付くを惡むを言ふなり。老子は又一般の法則として柔弱の必要なるを経験的に説きて曰はく。

人の生は柔弱なり。其の死は堅強なり。萬物草木の生は柔脆なり。其の死は枯槁なり。故に堅強なるものは死の徒。柔弱なるものは生の徒。是を以て兵強ければ勝たず。木強ければ則ち共なり。強大は下に處し。柔弱は上に處す。第七十

堅強なる者は死の類なり。共は拱把なり。拱把になれば則ち伐らる。

第十節 結論

以上に於て老子下篇の大略を説き終れり。其の無的狀態と聯想せる所の者漠然たりと雖も此れを假定するときは老子の思想は一貫し居ると謂ふべきなり。老子の言によりて此の篇を結ばんに。老子曰はく。

學を爲せば日に益す。道をなせば日に損す。之れを損し又損して以て爲すなきに至る。爲す無くして而して爲さざることをなし。故に天下を取るものは常に事無きを以てす。其の事あるに及んては以て天下を取るに足らず。第四十 入章

而も之れに據り之くとして自適せざるなきなり。曰はく。

善く建つものは抜けず。善く抱くものは脱せず。子孫祭祀を以て輟まず。之れを身に修むれば其の

善く建つものは抜けず。善く抱くものは脱せず。道は形を容す。道ありれば則ち子孫祭祀して輟むとなし。

徳乃ち眞なり。之れを家に修むれば其の徳乃ち餘りあり。之れを郷に修むれば其の徳乃ち長し。之れを國に修むれば其の徳乃ち豊なり。之れを天下に修むれば其の徳乃ち普ねし。故に身を以て身を觀、家を以て家を觀、郷を以て郷を觀、國を以て國を觀、天下を以て天下を觀る。我れ何を以て天下の然るを知らんや。之れを以てなり。第五十 四章 然れども老子を知るものなし。嘆じて曰はく。

吾が一身に就て以て他人の一身を觀、吾が一家に就て以て他人の一家を見る。以下之に倣ふ。

我が言甚だ知り易く。甚だ行ひ易し。天下よく知ることなし。よく行うことなし。言に宗あり。事に君あり。夫れ惟だ知ることなし。是を以て我れを知らず。我れを知るもの稀れなれば我れ貴し。是を以て聖人は褐を着て玉を懷く。第十七 十章

吾が言と事と皆主とする所あり。而かも世人知らず。而智者なればなり。大なるが故に知る能はざるなり。聖人は外觀を美にせず。内は即ち美なり。

第四章 老子哲學の内に含有する胚種

以上述べたる處に於て、老子の思想は實踐的現世的なるを知る。無的状態は心地にして哲學上の原理にあらず。老子は心地にて宇宙を見たる故に此の無的状態が又根本なりとなせり。而して無的状態を呼びて道となせり。又他の多くの異名を用ひたり。「アメリカ」の「ケールス」(Carr)氏は老子の無を解して *logos* となせり。此れ誤れり。西洋哲學者の用ひたる *logos* は論理的規則的の場合に之を限り。少くも心地にあらずして智識に關するなり。若し *logos* たらんには宇宙の秩序は之れより起るとなさざる可らず。之を人性に應用し、人間の行爲は皆規則的なりとなさざる可からず。然るに善く之を味ふ時は此の如き解釋は老子の心情にあらざるを曉らむ。老子は哲學にあらずして實踐學なることに注意せよ。智識にあらずして

心○情○な○る○と○に○注○意○せ○よ○。前○に○述○べ○た○る○爲○無○爲○と○か○不○言○之○教○と○か○弱○克○強○の○如○き○が○果○し○て○論○理○的○に○解○釋○す○可○き○か○。是○れ○に○よ○り○て○以○て○老○子○の○道○を○解○し○て○*logos* と○な○し○或○は○智○識○的○と○な○し○論○理○的○と○な○し○或○は○哲○學○と○な○す○説○の○一○方○に○偏○す○る○を○知○ら○ん。

老子の道は人間行爲の一切方面に亘りて之を應用することを得べし。換言すれば如何なる行動も此の心地にてなすべきなり。然れども如何なる方法が此の心地に合したりと謂ふ可きか。此れ重要な問題なり。老子之に付て謂ふ所あり。故に本文之を引用せり。終に臨むて如何に後世の道學派と目せらるる者が老子の上下二篇の内に其の胚種を發見するやを述べん。

一。厭世。老子に厭世の思想なし。但だ老子は當時の政治を以て自己の道に合はざる者となし、之を輕侮せり。此の思想は歷々として其の文字の間に見はる。當時の政治を厭ふの思想が一轉して終に老子を讀むて厭

世する者あるに至れり。又老子を以て厭世的なりしとなす者あるなり。

二。哲學。老子は哲學にあらず。然るに天地に關するの說あり。無有を生ずるの言あり。之を哲學的に解釋するは勢の免れざる所なり。列子は無と有との間に諸種の階段を設け、以て天地の創造を解釋せんと試みたり。

又老子の内に矛盾的對立の思想あり。此の思想は莊子に至りて十分に發達せられたり。

三。即身絶對。含徳の容は赤子に比す。毒虫も螫さず。攫鳥も搏せず云云の言あり。此れ即ち即身絶對の說にして列子に至りて十分に發達せられたり。又之を一方面より解釋すれば自己の容貌をして靜的虛的無的ならしめんとする者にして養性説となるなり。深き意味に於ては天隱子の如くならんとし、淺き意味に於ては抱朴子の如くならんとす。

四。虛無主義。老子に無の字多し。又無有を生ずるの言あり。之を淺

薄に解釋すれば、虛無、Einsamkeitが本源にして道たり。隨て尤も貴むべき者なり。是れ三國七賢の徒なり。王弼も亦是れなり。

五。策略。老子に策略のこと多し。之を學むて策略家となる固より怪むに足らず。

要之。皆老子の正意にあらず。之を誤解し、又は之を淺薄に解釋し、又は一部を解釋したるに外ならず。其の勢恰もソークラテースより小ソークラテース派の分かれ出てたるが如し。メガラ學派の機智を好みたる偏にあらずや。犬學派の實行に強むる、又甚しからずや。而して快樂學派の快樂を主張する誤らずや。ソークラテースに門人プラトーンあり。老子の後に列子、莊子あり。似たりと謂ふ可きなり。

3/19/41
虛無恬澹主義 終

明治三十九年五月二十九日印刷
明治三十九年六月三日發行

虛無恬淡主義奥付

正價金四拾錢

不許複製



著者 遠藤隆吉

東京市京橋區南大工町一番地

辻本卯藏

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

印刷者 青木弘

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

株式會社 秀英舍第一工場

印刷所

發行所

東京市京橋區南大工町一番地

弘道館

關西賣捌所

大阪市東區南本町四丁目五十番地

合資會社 積文社

弘道圖書館雜誌大賣所

東京市神田區表神保町三番地(電話本一四八)

東京堂

東京市京橋區中橋廣小路六番地

前川文榮閣

東京市日本橋區吳服町

(電話新三〇七九)

北隆館

名古屋市本町三丁目

(電話五〇)

川瀬書店

大阪市東區安土町四丁目

(電話一一三〇)

積善館本店

福岡市博多中島町九番地

(電話四三)

積善館支店

廣嶋市鹽屋町

積善館支店

久留米市米屋町

菊竹金文堂

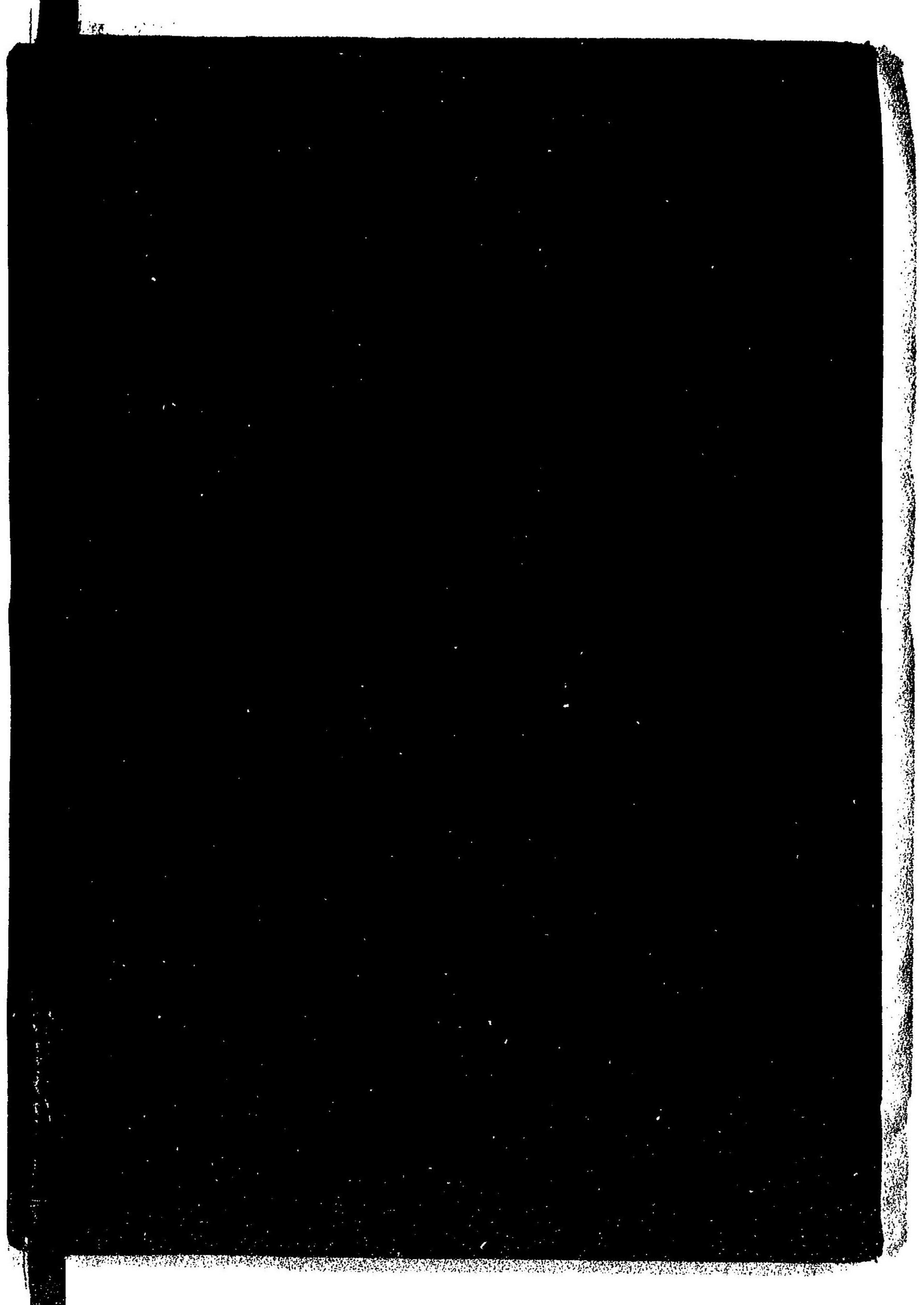
熊本市上通り三丁目

長崎次郎

長岡市表四町

目黒書店

33
1187



46

008212-000-7

33-487

虚無恬淡主義

遠藤 隆吉/著

M39

AAC-0086



